

フレンドリーショップに就職した

ダリエ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かつてこの世界へと転生し、ポケモンリーグのチャンピオンを目指した少年がいた。

しかし夢破れた少年はフレンドリイショップに就職することを決意した。

「ようこそフレンドリイショップへ！」

そんなフレンドリイショップの店員が自分の職と会社を守るために戦うお話。

※赤緑青黄FRLGピカブイポケスペとかなりごちゃまぜな世界です。ご注意ください

| | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 八話 | 七話 | 六話 | 五話 | 四話 | 三話 | 二話 | 一話 |
| 81 | 73 | 58 | 46 | 35 | 21 | 11 | 1 |

目次

一話

そこは薄暗く、所狭しと棚が並び、全ての段にはびっしりとダンボール箱が隙間なく置かれていて窮屈だ。

「よっ」

「どつこいしよ」

そこでは二人の人間が働いている。

一人はお腹が出ている太った中年の男。人当たりの良さそうな丸っこい顔が特徴的で、見た目通りにのっそりと動いている。ポケモンに例えるとヤドンかカビゴンと言ったところか。胸には店長と書かれた名札が付いているのでなにかのお店の店長であることがわかる。

もう一人は若い男で中年の男と同じ制服とエプロンを身につけている、よく鍛えた体には清潔な白いシャツを身につけ、太い腕が捲りあげた袖から見える。手にはしっかりと軍手をして店長とは逆にキビキビと軽快に作業をこなしていた。

「ボールの在庫は十分。スプレーは少し足りないから発注して……あとはくすりと状態なおし系だけでもう受注済みの配達分を差し引いて考えると……」

「そっちは在庫どんな感じだい？」

太った店長が青年に尋ねる。

「ちよつと入れておいた方がいいかもしれないですね。くすり系は長持ちするんである程度は在庫あつて損もないですし。こっちは届くのも少しかかりますから」

「じゃあそうしようか。そうだ。またピッピ人形仕入れて良いかな？」

青年は店長の提案に苦笑しつつ答える。

「またですかー？ 好きですね店長も。まあぬいぐるみなんでしつかりと棚を掃除しておけばそこまで問題ないですし、いいんじゃないですか？」

「やったー」

若い店員は中年の店長と談笑する。無論二人の手は速度の差はあれどしつかりと動いている。二人とも真面目な人物であることは間違いないだろう。

「すいませーん！ 店員さーん！ いますかー？」

表の店の方からの声が二人の居る場所へと届く。商売におけるもつとも大事な要因、お客さんが来たのだ。

「おつとー！ お客さんだ。こっちは僕がやっておくからレジ頼めるかい？」

「わかりました。行つてきます……………いらつしやいませ！ フレンドリイショップへようこそ！ なにかお探し物ですか？」

若い店員は作業を中断し、接客をするために軍手を外しながら在庫のある暗いバックヤードから軽快な店内BGMが流れる表の明るいカウンターへと向かう。そのお客さんはこのお店には初めてきた客だった。

そう。彼女は赤地に白でモンスタールボールを象ったデザインの帽子を被り、動きやすい恰好で整えた、ちょうど十歳になったばかりくらい……………



ここはカントー地方のトキワシティ。

そこに一軒建っているフレンドリイショップ。主にポケモン向けのグッズなどを取り扱っているお店。基本的には縮めてショップと呼ばれていて全国各地の主要な街に存在する身近な店だろう。

ポケモン関係のアイテムを取り扱う我がショップだが、普通に携行食品などの旅の必需品。それにメール用の便箋やポケモンを模した人形、店舗によっては各地の銘菓なども扱うこともある。お隣であるジョウトのいかりまんじゅうやホウエンのフエンせんべいなどがそうだ。人が食べてもポケモンが食べても美味しいが遠方なので仕入れが大変だったりするというのは店員だけが知っている。

そんなショップに来て、少女は俺たち店員が頭を捻って考えた渾身

の配置がなされた陳列棚たちにわき目も振らず一目散にカウンターへとやって来た。

もうちよつと見てくれてもいいんだよお嬢さん？お兄さんたちは頑張ったんだよ？

「モンスターボールを五つください！」

そして少女はカウンターの俺の気持ちを知る由も無いのでボールを求めろ。

これだけのやり取りだが俺のショップ店員経験からするとすぐに答えが導き出せる。

「モンスターボールですね。そちらでしたら十個買うことにこちらのプレミアボール一個お付けするキャンペーンがございませうがいかがですか？プレミアボールはモンスターボールと同じ性能なのでそのまま一個分お得ですよ？」

「そうなんですか？ うーん、よしっ！ やっぱり十個でお願いします！ おいくらですか？」

俺の営業スマイルとトークが決まる。こうかはばつぐんのようで、少女は可愛い財布の中身を一瞥、ほんの少しの逡巡の後に当初の倍の数のボールを買ってくれた。そしてこのキャンペーンを知らないということは何の予想は間違いないだろう。

赤と白のボールを十個と真つ白なボールを一つ用意して袋に包んでから少女に渡しながら、俺は尋ねる。

「お買い上げありがとうございます。ところでお客様はボールの扱いはご存知ですか？ 必要ならば私で良ければ説明させていただきますが？」

「本当ですか！ お願いします！ 私、今日からマサラタウンを出て旅に出るんです！ それで早速ポケモンの捕獲もやってみようと思つて！」

少女は興奮気味に、まぶしいばかりの笑顔で俺にそう言った。

やはりだ。この時期になるとお隣の町マサラではポケモン研究者であるオーキド博士（当トキワ支店のお得意様である）が十歳になる子供たちにポケモンを渡し、凶鑑を持たせて旅に出るのだ。

この子もその一人ということだろう。新米トレーナーには先輩として優しく教える事にする。

それとこの街のショップは隣のマサラとここトキワの二つを担当するわりはかなり暇なのだ。今はトキワジムも閉まっているからなおのことである。だからちよつとくらい勤務中に店を開けていても文句言われないのが利点と言える。

「店長ー。自分ちよつと出ますねー!」

「いつものだね。いつてらっしやい。ついでお昼のお弁当買ってきてくれないかい」

「わかりました。いつもの特盛デラックスカビゴン幕の内とサイコソーダですか?」

「わかつてるじゃないか。頼むよ」

裏からのそりと店長が顔を出して留守番を買って出てくれた。ついでお使いも頼まれたがいつものことなので俺は自分のボールをしつかりと確認してから財布と試供品のきずぐすりセットをいくつか取ってカウンターから出る。

「お待たせ。それじゃあ行こうかお嬢ちゃん。そうだ。お名前聞いてもいいかな?」

「はい! 私はいアユミって言います! こっちは相棒のイーブイ!」
「ぶいっ!」

「よろしくお二人さん。俺はエイジユ。でも俺のことは店員さんで構わないよ。それじゃあ行こうか」



そうして新たな旅を始めることになった少女にポケモンの捕獲を教える俺はフレンドリイショップの店員のエイジユ。

こんな風にNPCっぽいことをしているが元はゲームやアニメなどでポケモンとこの世界を知っていたいわゆる転生者だ。

幼い日は毎日のようにテレビにかじりついて、いつかは自分もとポケモンバトルの観戦を熱心に行っていたものだ。そんな憧れを募らせ

る日々を過ごしていたら俺はあつという間に十歳になり、この世界における義務教育も終了した。

生来の知識もあって学校を好成绩で卒業した俺は十歳の誕生日のお祝いに親からサファリパークに連れて行ってもらい、そこで手持ちとなるポケモンを初めてゲットした。それから少しの間、親の信頼を得るために実際にポケモンと過ごしてから、周囲には進学を期待されたもののそれを蹴って俺は多くの子供たちと同様に故郷を旅立った。

その時、俺は内心でチャンピオンになることを夢見ていた。

いや、夢どころかチャンピオンになることを信じて疑っていなかった。我ながらまるで現実を知らぬ子供みたいだが、俺のポケモンの知識は既にこの世界で最高。時系列的には十年は先の情報までであった。知ってるポケモンはオーキド博士の提唱したカントー151匹の数倍。そのポケモンの全てのタイプにほとんどの習得技を最初から知っている。足りない知識は今生で補えば良い。そう思っていたし、事実できていた。

故郷を旅立つてからは俺はサファリで出会った三匹のポケモンと文字通り無双したのだ。

最初に訪れたセキチクシティからジムに挑戦を始め。それからクチバ、ヤマブキ、ハナダ、ニビ、トキワとジムを制覇して歴代記録でも最速を大幅に塗り替える速度で六つのバッジを手に入れた。

しかし、いざ七つ目のグレンジムへ行こうとした時。第二の人生で最初にして最高のつまずきをしたのだ。

俺は当時なみのりを覚えたポケモンを持っていなかったたので定期船に乗ろうとした。

ゲームと違い普通に定期船も出ていることは知っていたし、チケットも事前に取っていた。そして意気揚々とそれに乗った瞬間。俺は立ってはいられないほどの衝撃を受けた。

それは船酔いだった。この世界の海はポケモンが大量にいるために基本荒い。俺はその揺れに耐えられなかったのだ。やむなく船医から下船するように言われ、結果船を降ろされた。

そうしてグレン島へと行けずに、俺のポケモンリーグへの挑戦はそ

ここで終わった。ポケモンでなみのりをしてもきつと酔うし、当時は空を飛べる手持ちもいなかった。そもそも行ったことない街には行けない。なんでこんなところだけゲーム準拠なんだと枕を濡らしたものだ。

無念の中で俺は故郷のタママシティに戻り、しばらく諦観の元でグレて三日ほど近所の暴走族に自転車で混じってブイブイ言わせてりしていたがすぐに親にバレて怒られたのでベソかきながら俺は就職を決意。

そして、この世界における職業的な安牌を考えた末に、フレンドリーシヨップに就職した。

それから七年。俺は持ち前のポケモンの知識を活かし、アイテムを売った。実際にこうして店員の仕事に就いて思ったがこの仕事は天職だったように思う。知識は活きるし、道具の使い方はまだ見ぬ新製品も含めてほしい把握済み、なによりシヨップに訪れてくる夢と希望に溢れたトレーナーとポケモンを見るのは楽しい。彼ら彼女らとおしゃべりもできる。

バトルからは離れてしまったがこれはこれで良い人生だと俺は考えていた。まだ酒も飲めない年齢だが俺の人生はもうこれでいいという気さえ最近はある。でもお賃金は上げてほしい。

「よし。着いたな。一応説明するところはトキワの森。虫ポケモンが多く棲んでる場所だけど……本当にここで良いのかい？ 女の子は虫ポケモンが苦手なイメージあったんだけど」

「はい！ 私バタフリーが欲しいんです！ 虫ポケモンだけど可愛いから！」

あー蝶々だからね。確かに可愛い。

「なるほど。それならキャタピーを探そうか。トランセルだとたまに攻撃技を覚えてなかったりするからね。たいあたりといとをはくは意外に使い勝手の良い技だ。きつと君の旅路の助けになるだろう」

「わかりました店員さん！ 行こうブイブイ！」

少女はブイブイとともに草むらをかき分けて進む。まだまだ慣れてないのかおっかなびつくりと言った具合だがこれが初々しくて可

愛い。

「キヤタピー？ どこー？ ……わっ！」

草むらをかき分けていくとポケモンが飛び出す。今回は黄色くて硬いあいつだった。

「おおっ、コクーンか。どくとむしの複合タイプのポケモンだ。イーブイとの相性は普通だね。試しに戦ってみたらどうだい？ ポケモンの怪我は治してあげるから。それにジム戦前にイーブイを成長させた方がいいからね」

ちなみに俺はキヤタピーとビードルならビードル派だ。スピアーだけでもカツコいいのにメガスピアー？なんだそれは！たまんねえぜあの種族値！……まあ持ってないんだけどね。ウチの虫枠も毒枠も既に埋まっているし。

「あれがコクーン……！ あっそうだ凶鑑！ 凶鑑を出してっ……と。いけっイーブイ！ たいあたりよ！」

「ぶいっ！」

「っ！」

「気を付けて、攻撃が来るぞ」

イーブイのたいあたりに対抗してコクーンはどくばりをしてきた。どうやらこの個体は進化前の技も覚えていているらしい。

この世界のポケモンは覚えられる技が四つとは限らない。自力習得可能な技は訓練次第で忘れないし、技マシンの技や教え技、遺伝技もしかりだ。公式試合では一匹につき四つまでの制限はあるが野生ではその限りではない。まあコクーンはどう頑張っても四つの技しか使えないが。

自分のポケモンは多くの技からどれを使うか、いつ使うか、試合中に使った技はなんだったか、そもそも自分のポケモンが扱える技は、などと言った知識や判断から、一流のトレーナーだと相手の覚える技も知らなければならぬ。ポケモンバトルは知識勝負の面も大いにある。

だから俺は有利だと思っていたのだけど。船酔いなあ……。グラードンでも捕まえてグレン島まで地面を作ってから移動するか？

それともグレン島に空港建てるか？飛行機酔いはしないし。

そんな益体のない考えをしているとイーブイがでんこうせっかでコクーンを倒した。戦いで少し消耗したイーブイを治療する。

「さあ、きずぐすりを……よし。じゃあ続けようか」

「はい、ありがとうございます！ キヤタピーどこだー？」

「ぶーい？」

「さてと……俺も探すの手伝うかね」

その後、二人と一匹で草むらを搜索を続けるとやっと目当てのキヤタピーが見つかった。

「やった！ 早速ボールを……投げていいですよ？ 店員さん？」

「ああ。まずはしっかりと当てることを意識してみてくださいらん」

「はい！ 見ててくださいいね！ えいっ！」

ピ ピ パーン！

「ああっ！ ボールが壊れた！ これ不良品じゃないですか!？」

「こら。失礼なことを言うもんじゃありません。」

キヤタピーを捉えたボールは一度は中に収めて見せるも失敗して真つ二つに割れた。素人目に見ても壊れて見えるし、実際もう使えない。後で回収しておくか。この世界だと使用済みボールは回収してショップに届けてもらえばリサイクルできる。届けてくれたボールに応じて割引券を渡しているのでは是非ご利用してほしいと少女に教える。

「落ち着いて。ここからがレクチャーだ。ポケモンを捕まえるにはいきなりボールを投げるよりもバトルをして弱らせるのが近道なんだ。戦闘以外にもきのみとかで気を引いて捕まえる方法もあるけど……きのみ代も案外馬鹿にならないからね。だからイーブイでしばらくバトルをするんだ。お互いのポケモンのひんし状態には気をつけてね」

「そうなんですか？ わかりました！ よーし！ 行ってイーブイ！

でんこうせっか！」

それから何度かイーブイはキヤタピーに攻撃を加えた。見た感じはもう赤ゲージだろう。あのイーブイは相当優秀な個体のようにだ。

「よし。ここでボールを」

「今度こそ！ お願いつ！」

少女はキャタピーの赤い角へボールを命中させる。ボールは弾かれて空中で開き、キャタピーをその中に収める。そうして地面へとほとりと落下。それから揺れ始めた。

ピ ピ ピ ポーン……！！

草むらの中で赤いボールが三回ほど揺れる。そして最後に音がなるとボールは静かになった。これがポケモンを捕獲した合図だ。

「やった？ やった。やったー！ ゲットだー！ イーブイありがとうー！ 店員さんもありがとうございます！」

「ぶいっ！」

「初ゲットおめでとう。君と一緒に頑張ったポケモンの怪我を治してあげよう………よしできた。これで二匹は元気いっぱいだ。新しいトレーナーの門出を祝って試供品のきずぐすりとダメになったボールの代わりに一つモンスターボールをあげよう。これからもフレンドリイシヨップをよろしくね」

俺は彼女のポケモンゲットのレクチャーを終えて、試供品のきずぐすりを渡してから別れて俺はトキワで弁当を買って店へと戻った。

ちなみに俺は普通の弁当にした。飲み物はパッケージにトロピウスとナツシーが描かれたプロテイン。

「ただいま戻りました。これ頼まれていたお弁当です。店長お先に昼休憩どうぞ」

「お疲れさま。そしてありがとう。あの子はどうだった？」

店長は袋を漁りながらそう聞いてくる。

「無事にキャタピーを捕まえてトキワの森を進んで行きましたよ。あの子も大成するといいですね」

「そうだね。前に来てくれたオーキド博士のお孫さんとその幼馴染の男の子と女の子はすごかったらしいから、それに続いてくれると僕らも地元の店員として鼻が高いね」

今までこの店には多くの少年少女が訪れた。

中には当然グリーン^彼、レッド、ブルー^ちもいた。その噂は耳に届い

ている。

きつと彼らは俺が行けなかった先に行けるだろう。羨ましくもあるがそれを後押しする立場も悪くないと思う。

「まあここはマサラじゃなくてトキワですけどね。彼らはみんなマサラ出身です」

「それは言わない約束だよエイジユ君」

「ははははは」

フレンドリイショップトキワシティ支店は今日も平和である。

二話

朝七時ちようど。マサラタウンのとある場所にある一軒の民家にトキワシテイのフレンドリイショップで働いている男の姿があった。

ジリリリリリ！ ピッ

「うーん……きて。今日も今日とて出勤だー」

俺はけたたましくなるビリリダマ型の目覚まし時計のアラームを止めてベッドから起き上がる。

部屋のカーテンを開けてあさのひざしで脳みそを覚醒させ、そのまま夜に用意していた炊飯器のボタンを押して朝食の準備をしている間にシャワーを浴びる。客商売なので身だしなみはしっかりと整えるのだ。

それからは自分のご飯とポケモンたちの食事の準備だ。

ポケモンにも個性があるように彼らは種族ごとに食性が異なる。なんでも食べるポケモンもいるがミツが主食だったり、鉱物ばかり食べるポケモンもいる。俺の手持ちはその辺は問題ない種ばかりだ。

もちろんほとんどのポケモンに対してほぼ万能と言えるポケモンフーズ（なんと社員割が効く。助かる）も我らがフレンドリイショップは扱っているが、やはりそれだけだと味気ない。

なので俺は基本的にフーズにそれぞれの好きな味のみや自作のポロツクにポフィン、ポフレを食べさせている。他の食べ物もあるがそれらは輸出品になるのでちよつと手が出せない。

俺のパーティは全員がサファリゾーンで捕まえたポケモンだ。内訳はストライク、ニドキング、カイリユウ。元はニドリーノとミニリュウだった二匹もおつきみ山で拾ったつきのいしだったり、戦闘を重ねたりで進化した。

本当はリーグに向けての六匹編成が良かったのだが、専門トレーナーでもないのなら三匹くらいが何かとやりやすかったりするのだ。まあ本当ならグレン島で残りのポケモンを補充するつもりだったのを断念した結果なのだが。

そういうことだから昔から基本的に俺は昔からこの三匹がパート

ナーだ。全員同じ日、同じ場所で出会った仲間。

そんな彼らの今日の朝食は、カイリユーはまじめで好き嫌いをしないのでフーズと季節のきののみ。ニドキングはむじやきな性格なのであまいきのみをベースににがみを排除したフーズ。ストライクはゆうかなな性格なのでからいきのみをベースにあまさを取り除いたフーズ。

「できたぞー」

そしてモンスターボールから三匹を出す。全員元気いっぱいなので今日もしつかり残さずごちそうさまだ。

「じゃあ俺もいただきまーす」

俺の朝ご飯は米と味噌汁と漬物とだいたいは昨日の残りだ。今日はなんかの鳥の胸肉を蒸したやつ。多分ポケモンじゃないと思う。男の一人暮らしなど世界が変わってもこんなものだ。

「ごちそうさまー」

食後にプロテインエネココア風味を作って一息に飲んだ。うんおいしい。そして食器洗い機に皿をぶちこんでショップの制服に着替えて出勤だ。

「よーし。みんなボールに戻れー。じゃあいつてきまーす」

誰もいない家に別れを告げて出発する。

俺はトキワでなく、家賃が安い隣のマサラタウンに住んでいる。そういえば昨日のあの子がマサラタウン出身なら前にどこかで会ったかもしれないなと思いつつご近所さんに挨拶をしてトキワシティへと向かった。

「さあ、今日も一日頑張ろうか」

「はい店長」

店についたら既に来ていた店長と二人で朝礼を済ませ。いつもどおりに店を開ける作業をする。

このショップは余所と比べて客足が多くない。もつと言えば少ない。なので正社員はこの店長と俺の二人だけ。他の人員は地元に住むパートの奥様やおこづかいが欲しい学生なんかだ。俺たちのどち

らかが休む時に入ってもらおうくらいなので基本は男二人で回すのが常となっている。

ん？ゲームだと二十四時間営業だって？勘弁してほしい。トキワ店は特に近くに森があるため夜は虫ポケモンが灯りに釣られてやってくるし、そもそも二人だと過労で死ぬ。そんなのはポケモンセンターだけで十分だ。

将来的に合併される？やめろ。それは言うんじゃない。

「それじゃあ僕は店番やっておくから君は配達よろしくね。配達表に書いてるけど今日はマサラとセキエイ高原までの荷物もあるから」

「さっきマサラから来たんだけどなあ。あ、今日はトキワ近郊の配達はないんですね。ええとマサラは……ああオーキド博士のところですか。あの人顔合わせたらいつも研究所に来ないか勧誘してくるんですね」

「ははは。いつそなつちやええばどうだい？ 君ならやっていけるんじゃないか」

「まあできますけど……それでセキエイってことはリーグですね。ああ！ やっぱいいかりまんじゅうだ。リーグのシヨップは早く取り寄せてあげればいいのに」

「いつものことさ。それにしてもこっちが話を振っておいてなんだけどあつさりとなれると言えるのが凄いなエイジユ君」

もしもカントーのフレンドリイシヨップも合併されたら本当に研究者になろうかな。センターと合併されたら二十四時間営業まったなしだろうし。夜は寝たいのだ。でも学者も忙しそう。

「それでもあります。ポケモンのことには自信あるんで」

「そうだよ。まあそれはいいや。ひとまず配達よろしくー」

「はーい。行ってきまーす」

俺は荷物を確認し、専用のバッグへと商品を丁寧に移し替える。最後にフレンドリイシヨップの制帽を被り外へ出た。そしていつも腰に付けているボールを一つ取り出してポケモンを出す。

「出てこいカイリユー」

俺が繰り出したのはカントー唯一の600族のドラゴンタイプ。

黄色くてずんぐりした可愛らしいドラゴンポケモンカイリユード。昔サファリの水場で釣ったミニリュウが進化した姿だ。就職してからは空を飛べるので特に重宝している。

「まずはマサラタウンまでそらをとぶ！ 急ぎじゃないからゆっくりね」

「がう」

カイリユードは体に比べてやたら小さい翼を広げてから俺をその手で抱えて飛翔した。これで三分もかからずにマサラタウンへと到着する。

「ありがとうよ。お前はこれのお手紙を届けておくれ。終わったらここに集合。頼んだぞ。さて、お邪魔しまーす。フレンドリイシヨップですけどー宅配にきましたー」

カイリユードにも手紙が入った専用のバッグを掛けてやっている。それを持ってマサラタウンを回るのだ。頭も良いし、カイリユード種は元来が温厚な気性なのでできることだ。

一方こちらは研究所の建物の中に入ると髪はすっかり白髪になっているが背はピンと伸びたまだまだ健康そうな老人が俺を元気に出迎える。彼こそがかの有名なオーキド博士だ。博士は嬉しそうに俺の方へと歩み寄る。

「おお！ よく来てくれたのエイジユ君！ 待っておったぞお。荷物の方はいつも通りハンコでいいかな？」

「大丈夫です。取扱注意ってことはまたポケモン図鑑ですか？」

「そうじゃ。この前ピカチュウを連れた少年とイーブイを連れた少女が店に来なかったかな？ その二人に渡してたからの。また新しく作らなければならぬのだ」

イーブイを連れた女の子は昨日のアユミちゃんだろう。ピカチュウの子……記憶にないな。大方ピカブイのライバルの子かな。

「お嬢ちゃんは来ましたがど男の子は来ませんでしたよ。最近は仕事も休んでないので入れ違いってこともないと思います」

「そうじゃったか。まあ元氣そうな少年じゃったからのう。それはもうよい。それよりも君が来るのを待っておったんじゃよ。実はまた

新しい学説が見つかったな。是非とも意見を聞かせて欲しい！」

「カイリユールが戻ってくるまでしばらく時間もあるでしょうし構いませんよ。でもその前に受取表にハンコくださいね？ 俺も仕事で来てるので」

「あつ。これはすまんかったな！ えーとハンコ……おーいナナミー！ おらんのかー？ ハンコどこに置いたか知らんかあ〜！」

そう言っただけはスリッパでぱたと音を立てて研究所の奥へと消えた。オーキド博士は痴呆とは無縁そうだが意外とおつちよこちよいな老人であった。

それから十数分後。

「……なので結論を言うとポケモンの卵は実在するでしょうね。生物である以上繁殖はしますし。各地の伝承にもそういう記述は散見されます。シンオウ神話なんかわかりやすいでしょう。ただ学者たちが卵の確認を中々できなかったので発見が遅れていただけに過ぎないと言えます」

「我々には中々に耳の痛い話じゃな。ワシもオダマキ君のようにもつとフィールドワークを増やすべきだろうか」

「まあ卵に関してはこれからでしょう。人間はポケモンと長く過ごしては来ましたが学問の研究対象として確立したのは最近。何事も始まりはあるものです。前例はあるものではなく作る物ですよ」

「そうじゃな！ よし！ そうと決めたらワシもじつとしてはおれん！ ちよつとウツギくんの所まで行くとするかのー！」

オーキド博士はそう言っただけで支度をすると研究所から出て行った。ポケモンの卵か。流石に本物の命で厳選なんかする気はないが卵抱えてサイクリングは実際にやってみたいな。どんな感じなんだろうか。

「とかせめて書き置きくらいすればいいのに」

また研究所の人たちがオーキド博士知りませんかって店に駆け込んでくるのは勘弁してほしい。

「さて『オーキド博士はジョウトのウツギ博士のところへと行きました。b y エイジユ P S フレンドリイ ショップのまたのご利用をお

待ちしております』つと。これでいいか」

俺はその辺の紙に代筆して研究所を出た。既にカイリユーは戻ってきており仕事ぶりを確認する。

「よーしよし。ちゃんとできたかな……? うん! サインはしつかりもらってるな。回収はできてるし、手紙は間違ってもご近所に届けてくれるだろうし。よくやった。ご苦労様。じゃあ俺たちは行くか」

「がう」

「ポケモンリーグまでそらをとぶ!」

「がうつ!」

俺たちは再び空を駆けた。

「……………」

「うわーもういるよ。暇なのかな? まあ暇なんだろうな。もういいよカイリユー。お疲れさん。しばらくその辺ではねやすめしてな」

「がう」

俺はリーグの建物の前に上半身裸で仁王立ちする男から少し距離を取って、空中でカイリユーから飛び降り、着地した。

「来たか強敵よ」

「はいはい来ましたよー。そんなにいきなりまんじゅう食べたいの? 本当、顔に見合わず甘いものが好きなんだから。甘いつつだけなら俺のプロテイン分けてあげようか? まんじゅう味はないけど」

「結構。あれより美味しい物はない。まあそれもある……が、お前も手合せしたかった」

「正直なのはいいけど勘弁してほしいよ全く。こっちは夕方までお仕事なんですけどね? じゃあ先にサインもらいますよー」

「うむ」

半裸の男改め四天王のシバは彼に似合った無骨な字を俺が渡した用紙に書く。それを貰えばお仕事モードは一旦お終い。

「はい。いつもありがとございませう。じゃあちよつと荷物置いてくるから待っててくれ」

「うむ」

それから服を脱いでその辺に置いて、シバと同じく半裸スタイルになった俺はリーグ前の空き地でシバと組手をしている。俺もそれなりのポケマッスルを持つ男。人間相手なら誰であろうと勝算はあるっつ！

「ウー！ ハーツ！」

「チエストー！」

数分後。

あれから数度の軽い牽制を繰り返し、今。トドメとばかりに声をあげた渾身の一撃を繰り出しあう。拳と拳が交わり重い音が響きあう。空気は震え、木々はざわめき、石畳は砕け、ポケモンはおびえて逃げ出し、熱き男たちの汗がほとばしる。

「……………」

そしてどちらともなく距離を取り、無言で一礼をして激しい組手は終わりを告げた。これはこれで良い訓練になるから好きだ。でもこれ職務放棄とかにならないかな？

「あなたたち何度も飽きないわね。お水いるかしら？」

「カンナさん。こりやどうも。あとお水ください」

いつの間にかそこには四天王のカンナがいた。カンナの言葉にシバも頷いてそれを確認したカンナはラプラスを出して俺たちの頭に水を浴びせる。

「あー気持ちいい。ありがとうございます。それで？ 今日カンナさんだけですか？」

持つて来ていたタオルで濡れた体を拭いて、服を着ながらも俺はラプラスの上でくつろぐカンナへと尋ねる。ちなみにシバは早速いかりまんじゅうを食べていた。お前そんなことしているとすぐ無くなるぞ。また配達を頼むつもりかい？ ご利用ありがとうございます。

「ワタルならあっちであなたのカイリユーにじゃれついてるわよ。早く行ってあげたら？」

オイオイオイ。こうかばつぐんじゃねえか。カイリユー瀕死になるわ。

なに？ワタルのやつドラゴン使いの癖してフェアリータイプなの？妖精さんなの？ドラゴン・フェアリーの複合タイプなの？完全なるドラゴンキラーじゃん。

まあ冗談だが。でもあいつドラゴンタイプのことになると早口になる類の人間だから早く戻ろう。

「そうします。それじゃあ二人ともまた」

「待ちなさい。これ私の注文票。よろしくね。あと今月号のカタログちようだい」

カナナが俺に紙を手渡す。俺はそれに必要事項が書いてあるか確認してバッグへと仕舞いこんだ。

「あー。またぬ「個人情報を守りなさい」はーい。カタログですね。どうぞ」

「よろしい。ではお行きなさい」

「フレンドリイショップのまたのご利用をお待ちしております」

氷タイプの使い手に相応しいぜったいれいどの視線で俺は黙らされた。そして彼女が購読している通販カタログをいくつか渡す。彼女もまたお得意様だ。

それから俺はカイリユーにじやれているワタルを追い払ってトキワシテイへと戻った。

うん？ワタルの扱いが雑？

いいんだよ。あいつなんも買わねえんだもん。その点シバとカナさんは同じタイミングで配達頼んでくれるから優しい。ちよつとくらいは付き合っちゃおう。

「ただいま戻りましたー」

「おかえりー。お疲れ様。戻ってすぐで悪いんだけどお昼買ってきてもらえるかな？」

「もう買ってきてますよー。はいミックス海鮮ホエルオー弁当とサイコソーダ」

ちなみに俺は今日も普通の弁当とプロテインモーモーミルク風味。

「ありがとう！じゃあお客さんもないしお昼にしようか。ああそうだ。これ。君宛てに届いてたよ」

「え？ なんだろう……。お給料上がったのかな」

「ないでしょ。健康診断引つ掛かったとかじゃない？ エイジユ君に限ってはないか。いただきまーす」

お腹を鳴らした店長から弁当と引き換えに手紙を渡されたのだった。その送りの主の文字を見た。

「シルフカンパニー？ フレンドリイシヨップチの親会社がどうして俺宛ての手紙を？」

「もぐもぐ。さあねえ。僕は健康診断に引つ掛かった通知くらいしか受け取ったことないし。とりあえず読んでみればいいんじゃないかな。僕も上からは特に何も聞いてないからねえ」

店長はサイコソーダで弁当を流し込みながらそう言う。ちゃんと噛みなさい。

この世界のフレンドリイシヨップはシルフカンパニーの子会社となっている。まあ当然であると言える。ボールもくすりもスプレーもあなぬけのヒモだってシルフ製だ。扱っている商品の大半がシルフカンパニーで製造されているのだからそれを売るシヨップがその傘下にいるのは当然の帰結となる。

俺に宛てられたその封筒を慎重に開けて読む。触って分かるが材質が良い。ただの連絡書類ではないみたいだ。店長もチラリと覗いてくるが気にしない。

「なになに——」

その内容はこうだった。

「昨今、ロケット団なる輩がカントー各地で悪さを働いている姿が目撃されている。」

その為、各地に点在するわが社の関連施設も彼らからの襲撃を警戒し、警備を強化する為に社員の中でも実力がある者を一度招集することになった。それに俺が選ばれたことになったらしい。

ロケット団の台頭ということは遂に原作が始まるのだ。このシヨップ周りの出来事は知らなかったがまあ起きなくはないだろう。強盗とかありそうだし、なによりシルフカンパニー本社がジャックされるのだから。

同じく後ろから人の手紙を盗み読んだ店長が嘆く。口からご飯粒飛ばしたら許しませんからね。

「ええ、君に出て行かれると僕も困るんだけどな」

「いいおじさんが変な声出さないでください。それに俺も急に呼ばれるのは困りますよ。来月はマサラタウンで地区対抗イシツブテ合戦があるんですから。俺これでもチームのエースなんですよ？」

「じゃあホイコットしちゃう？」

「流石にシルフの社長直筆の辞令は拒めませんよ。それに大丈夫です。ここトキワはジムくらいしかない田舎だからロケット団も来ませんよ。来てもジムリーダーとトレーナーが、最悪リーグの四天王がなんとかするでしょう」

「それはわかるよ。そっちじゃなくて配達とか君のポケモンが行ってくれるの、あれ凄く助かったのに……僕膝が悪くて」

「膝どころじゃないでしょうに。今度からはせめてトキワシティの中だけでも配達行った方がいいですよ。……わかりました。本部に行った時に代わりに若い人がこつちに来るようお願いしておきますから」

「ありがとう！ 誰が来るかなあ、若い女の子がいいなあ」

俺は内心で仕事ができるムキムキマツチヨなゴリキーみたいな人物を推薦しようと決意した。

「それじゃあ明日は休みなのでヤマブキの本社に行くので。もしかしたらそのまま異動なんてことも考えられますからね。配達サボっちゃダメですよ」

「わかってるよー。しかし本当に異動だったら悲しいなあ。早く平和になって欲しい物だねえ」

「……同感です」

その原因は同じ町にいるけど、それは言わぬが花だろう。

三話

タمامシシテイ近郊の空き地

「よし。お疲れカイリユー。ボールの中でゆっくり休むか? ……わかったよ。一緒に帰ろうか」

そらをとぶで移動するために出していたカイリユーをボールへと戻そうとしたが、この華やかな街並みをしつかりと覚えていたように嫌がられてしまった。

手紙を受け取ったその日。店長に早上がりを許されたので、俺は日暮れ頃にはマサラで借りている物件ではなく、そのまま地元であるタمامシの実家へと帰ってきた。ここは本社のあるヤマブキシテイの隣なので、これなら万が一にも遅刻の心配はないだろう。

目下の心配はもしかしたら明日付で転属になり、マサラの貸家を引き払う可能性を考えないといけないことだ。引っ越しの費用は出るのだろうかとか、グレンに飛ばされないかとか、今度のイシツブテ合戦のこととか色々考えてしまう。

そして、カイリユーを連れて街へと入り、少しだけ歩くと懐かしい我が家へと辿り着いた。

タمامシは都会なので住宅はビルやマンションが多いが、我が家は父の努力によって、中心部から離れているとはいえそこその大ききの二階建て一軒家に住んでいる。昔はその庭でまだ小さかったポケモンたちと目いっぱい遊んだものだ。

今は俺もポケモンも大きくなったのでちよつと無理だけど。

玄関へと近づいて前に貰ったカロス土産のクレツフィのキーホルダーにつけっぱなしにしている実家のカギを使ってドアを開いた。

「ただいま〜」

「あら!? どうしたのエイジユちゃん! 急に帰って来るなんて。まさかお仕事クビにでもなったんじゃない? ……!」

俺の帰宅に反応して母さんが出てきたと思ったら、いきなり失礼なことを言っけおった。母と息子といえど言っけ良い事と悪い事があるだろう。当然これは悪い事だ。縁起でもない。

「違う違う。ちよつと明日は朝から本社に行く用があったからさ。こつちから通勤しようと思っただんだよ。部屋そのままだろ？」

「なんだそうなの。じゃあお帰りなさい。お部屋も毎日きれいにしているわよ。あら、カイリユーちゃんも元気そうね。ニドキングちゃんとお父さんはまだお仕事だからみんなでゆつくりしててね。お母さんは買い物に行ってくるわ。今夜はおごちそうにするからねー！」

しかも、その勢いのままに財布とバッグを持ち出して出て行ってしまった。相変わらず元気な人だ。まあポケモン世界の例によって事実として母親としてはまだ若いのだが。

「はあく。なんか帰ってきたって感じがするな。とりあえず明日の準備をしておくか。お前たちは好きにしていっていいぞー。あ、カイリユーは二階に付いてくるなら浮いておいてくれよ。床が抜けちゃうから」そんな母を見ると何となく気が抜けた。

ボールから残りの手持ちであるニドキングとストライクを出した。ストライクとニドキングは人間の方が重いくらいだけどカイリユーは200kgあるので室内飼育は気を付けないといけない。床が抜けちゃうのだ。

なお、マサラの家は何故か素の状態で床板一畳の耐久重量が一トンになっていた。平屋とはいえ、すごいねマサラ。何を想定しているの？

そんなことを考えていたら、みんなちゃんと言う事を聞いて三匹とも庭で自由に過ごした。

べちよべちよ。

「おつと。ベトベトンもただいま。相変わらずお前は臭くないな。へドロだまりから釣り上げたのに」

「べ〜」

このベトベトンは俺が旅を諦めて荒れていたときに近所で釣り上げたベトベトンだ。これが思いの外いい子だったので、俺のポケモンというよりほとんど我が家のポケモンになったのだ。

ゴミならほぼ全部食べるからとってもエコ。俺のポケモンなので

一人暮らしに連れて行こうとしたが母さんに死守されたのは懐かしいものだ。

「外でみんな遊んでるからお前も行っておいで。留守番は俺がやるから」

「べ〜」

ベトベトンは喜びの声をあげてのそのそと這って庭へと出て行った。ウチのポケモンは仲良しで何よりである。

「さて……俺はどうすっかな」

これはこの時間のことではない。今後の身の振り方のことだ。

（原作のロケット団イベントが始まる。ということとはレッド。もしくはあのイーブイを連れて少女かピカチュウを連れて少年がロケット団を倒すんだろう。ここが初代なのかそのリメイクなのか、はたまた普通にピカブイなのか。もしくはポケスペなのか意外とアニメなのかはわからんが……ギエピーな世界だったらどうしよう……いや、ポケモンは喋らないからそっちは大丈夫か。よかった）

まあ、この世界がどんな物だろうと本来なら俺はトキワに籠っておくつもりだった。が、何の因果かこの舞台引きずり出された形になったわけだ。もし運命なんてものがあるのなら参加しろと言っているのだろう。

（関わりが持てる以上は俺のタマムシ故郷でロケット団がデカイ顔をされるってのは正直むかつく。それに万が一にシルフ乗っ取りが成功されたら俺は職を失う可能性もあるわけだ。それはいただけない）

そういう風に考えると不安になってきた。まだまだ再就職は余裕の年齢だがここより安定した職場はそうはない。俺もシルフ防衛に加わるのを想定くらいはしておくべきか。

（いや。やはりとりあえずは静観。ひとまず明日の本社での具合を見てから対応を決めるか……?!?)

俺は急いで部屋の窓を開ける。そして外を見まわす。

「誰かに見られていたような……」

下の庭では俺のポケモンが集まってわちゃわちゃしている。空では夕焼け空をポケモンが飛んでいる。ここはタマムシでもそこそこ

の住宅街地域なので周りは全部一軒家だ。道路にも人影はない。俺の部屋から見える家も大きな和風の屋敷で不審な人物は見当たらない。

「まあ流石にロケット団じゃあないだろう。大方通りすがりのそらをとぶだろうな」

俺はそう思いながらも実家で埃を被りかけている現役時代の荷物を押入れから引き出ししていた。



昨日の夜は楽しかった。あの後には特に視線を感じることも無く、父と仲睦まじく帰ってきた母はすぐに料理に取り掛かってごちそうを作ってくれた。

久しぶりに母の料理を堪能できたし、いつも無口な父もどこことなく楽しそうに見えた。ポケモンたちも機嫌が良さそうだったし。母はいつもニコニコしているのでよくわからん。なんならあの母はいつも上機嫌だ。

そんな二人に見送られて、しっかりとジャケットを羽織ってシルフカンパニーのあるヤマブキへと向かったのが今朝。念のために熱いお茶を持っていったがいらなかったらしい。邪魔だったので途中で飲んだ。これで帰りがダメだったら俺は怒るぜ。

「ここがシルフ本社か……久々に来たな。だが俺も末端とはいえ社員だ。胸を張ろう」

少々緊張しているが、俺は一階部分の受付へと向かう。どうされましたと訊ねる受付嬢に昨日届いた書類を見せると社長室に行くように言われたのでそれに従ってエレベーターに乗った。

「クソ……！ 忘れてた！ シルフカンパニーって迷宮じゃないか。ワープパネルってなんだよ！」

迷いましたー。ぎげんな。こんな違法建築に誰がした。ロケット団？ 建築家はロケット団なの？ 絶対許さんからな。

俺は予定していた時刻に遅れて社長室に到着してしまった。とて

もこわい。おそるおそる社長室の扉を開けた。
ぎゅっ。

俺が扉を開けた音を聞き入れた部屋にいた全員がこちらを睨んだ。
「おい！ 今は大事な会議中だぞ！ 入って来るんじゃないぞ！」

中にいたガラの悪い研究員が怒鳴り散らす。ん？ お前さては口
ケツト団だな？

「すみません。招集を受けたのですが設備に慣れておらずに遅れてし
まいました」

「あん？ 確かに一人足りなかつたが……慣れていない？ 確かに見
ない顔だな？ お前所属と名前は？」

今度は偉そうなトレナー風の男がそう聞いてきた。

「はい。フレンドリイショップのトキワ支店の従業員のエイジユで
す。本日はよろしくお願いします」

俺がそう言ったら部屋に立っていた大半が大声で笑い出した。

「ははは！ おいおい！ フレンドリイショップだつて!? 下つ端がこ
んなところに来るのか！」

「しかもトキワ！ あんな辺鄙なところじゃあ大した実力もないんだ
ろ？ ジムリーダーもよわっちいのかほとんどいないしよ！ 場違
いなんだよお前！」

俺は笑わいものになりながらもそれを見逃さなかつた。

（今トキワを辺鄙って言った奴を睨んだのが数人いたな。ということ
はやっぱりもう混ざつてるのか）

トキワは昔からボスであるサカキの本拠地だ。それを知っている
のは俺かロケット団だけだろう。つまりロケット団対策に集められ
た人員の中にロケット団がいる。これは不味い状況だ。

あとフレンドリイショップを笑つたお前。顔覚えたからな。お前
だけは敵でも味方でも報復するからな。絶対するからな。

「おほん！ みな静粛に。彼も私が社員の中から厳選して呼んだ者の
中の一人だ。さあキミもこちらに」

部屋の奥のデスクに腰掛けていた初老の男が声を掛けた。彼こそ
がこのシルフカンパニーの社長その人なのだ。

「はい！失礼します」

（うおー社長だー！ 生社長だー！ キャーしゃつちよさーん！ お賃金上げてー！）

悲しいかな俺は一般社員。バンギラスやユキノオーの前のラスキーネニンくらいには無力なのだ。

俺は既に一列に並んでいる彼らの端っこに加わる。

（研究員に……普通のトレーナーっぽい奴もいるな。しかしなんというか……）

人相の悪い奴が多い。これはもしかしたらこの場にはロケット団とシルフ側から既に寝返った奴しかいないんじゃないかとさえ思うほどだ。少なく見積もっても半数以上は敵と考えていいだろう。

「さて。全員揃ったところで本題に入るとしよう。諸君らも知つての通りだ。昨今ではロケット団の台頭著しくわが社の店舗も数多くが被害にあっている。そこで社内の人員を使って対策グループを作ることを決定した。ここに集まってもらった君たちは私がその経歴から選び抜いた精鋭ということになる」

社長がおっしゃった言葉に対して俺をチラチラ見てこいつも？と思っている雰囲気はまざまざと感じられる。

確かに俺も随分情けない理由でリーグ挑戦諦めたからそっちはちよつと反論しづらいけどさー。

「うむ。まずはそっちの君から言ってもらおう」

ちよつと俺の反対側から始まった。それぞれバッジをいくつ取ったとか、どこどこの大会でベスト何位だったとかを発表していく。

「俺はバッジ四個取ったぜ！」

「「おおー!!」」

（バッジ四個とか十歳児でも取れるんだよなあ……）

俺は内心そう思いつつも周りに合わせて拍手をした。自分に近づいてくる順番を見ながら考える。

（でもこいつら態度の割にバッジ4つが最高っぽいんだよなー。ここでバッジ七個持ってます！ って言うのは絶対気持ちいいけどあとのこと考えたら我慢しておいた方がいいか。眼をつけられても困る

し。適当にバッジの数鯖読んどこ)

自分の番が来たので俺は適当に過少申告しておいた。

「自分はバッジ二つとスクールでのポケモン関連の成績トップでした」

「うむ……おおう?」

社長は手元の資料と俺の言葉の差異に戸惑っているがなんとかウインクで意図を察してもらう。

「はっ！ なんだ！ こいつを馬鹿にしてたくせに大して実績変わらない奴もいるじゃねえか！ 情けねえなあ！」

「なんだと?! キサマツ！」

あえてギリギリ底辺じゃないくらいの成績を言ったが、そしたら荒くれトレーナーどもはそれで煽りはじめて一触即発の雰囲気だがそれはなんとか周囲に抑えられる。

(これで自分らがアウトローだと気づかれないと本気で思ってるのかこいつら? 馬鹿なの? 死ぬの?)

だいたいにして栄光のシルフカンパニー社員がそんな品のないことを口に出して言って良いと思ってるのだろうか。そもそも社長に対する態度もなっていない。こいつらへすぐにも社員としての薫陶を与えてやろうかとすら思いボールに手が向かう。

「おほん……！ 静粛に！ 少なくとも集められた諸君らの実力は納得してくれたと思う。それではこれより君たち防衛戦力を各地に配置しようかと思うのだが……何か質問や意見はあるかね? 意見は最大限考慮しようと思うのだが」

いくつか意見が飛び交う。俺は見に徹してそれを詳細に観察する。

(いや……本当にお粗末だ)

いくつか本当に社のことを考えたであろう意見が出るが、それはすぐに対案が出て賛成票多数で潰される。笑えるのはよく考えるとその対案が見事にロケット団がシルフカンパニーを襲撃するのに都合のいい案であることだ。

会議が紛糾する中で大体の顔を覚える。

(あいつとあいつ、それとあそこの団体は確実にロケット団。あの辺

は……今はグレーだが状況次第でいつ鞍替えしてもおかしくないな。彼とあの人はシルフ側だろうけど既に遠くに配置が決定されている。できるだけ敵味方を見極めているが、なんというかどうにもシルフの旗色が悪い。これ本当に主人公一人でなんとかできるの？

「おい！ せっかくだしお前の意見も聞いてやる。言ってみろ」

荒くれ研究員の一人がずっと黙っていた俺に発言を許す。今後のイベントを考えるにここでやるべきは一つだろう。

「あーそれじゃあ自分は実家がタمامシなんでタمامシかヤマブキがいいですねー（棒）近いし」

近いし。だけはマジだ。何より実家ならね。食費がね。掛からないんだよ。大事だね。

俺はつまり今回のイベントの本格参戦を決意した。近場にいればなんとか間に合うだろう。

「ははは！ 正直な奴め！ いいだろう。それじゃあお前はタمامシでいいぞ！ この機会にせいぜい都会を楽しんどきなー」

「うわあやったありがとうございます（棒）」

ガラの悪い男はそう言つてのんきな発言をした俺を敵にならないと思ってくれたのか、ショップ店員と書かれた紙をタمامシの場所に置いた。

そうして俺は適当にアホの振りをしてあつさりとタمامシシティに残留が決まった。

「いや馬鹿でしょ」

会議が終わり、その後「自分ちよつと今の貸家をどうするかについて社長にお聞きしたいんで→このあといいすつかく（笑）」とかチャラ男っぽく言つて警戒されずに堂々と社長室に残つて、こつそりと社長とロケット団の対策について密談をした俺は退社してから呟いた。

これがサカキならばきつと部外者は近場から完全に排除していただろう。それをアジトのあるタمامシに配置とか馬鹿でしょ。そもそもなんで集められた人員の情報の裏取りとかしてないんだ。

とにかくロケット団の計画は危うくなった。



「「かんぱーい！」」

俺は男友達とタママシのお店に集まって騒いでいた。音頭の後でそのまま飲み物を飲み干す。

俺は会議をしたその日、その足で友人の家へと赴き、「久しぶりに帰ってきたから遊ぼうぜ！」なんて誘いをして今に至る。

「それにしてもお前がフレンドリイシヨップに就職するなんてな……てつきりチャンピオンか四天王。ジムリーダーかと……」

「仕方ないよ。グレン島に行けないんじゃない」

昔からの友人たちは俺に期待していてくれたので期待に答えられなくて申し訳なきが募る。泣けるぜ。

「クソう……誰だよあんな孤島にジム建てた奴……なんて姑息な嫌がらせするんだよお……！　せめてそらをとぶでいかせてくれよお……！　なんで一度行った場所じゃないといけないんだよ……！」

俺はセキエイ高原にだって徒歩で行ったんだぞお……！」

まあそつちは挑戦者用じゃなくて業者用の出入り口を使ったんだけど。

「ほらほらエイジユ。愚痴は聞いてやるから今日は飲みな」

「僕たち未成年だからノンアルだけだね」

ぼくたち18さい！世間的には大人だが肉体的な成人はもうちょい先なのだ。お酒は二十歳から。

「かたじけねえ……！」

俺は居酒屋風なお店でドリンクを飲みながら数年ぶりX回目の男泣きの夜を過ごした。

それから数日。

俺は真新しい制服と制帽に身を包んで背筋を伸ばして挨拶をしていた。

「今日よりトキワシティからこちらへ異動になりましたエイジユと言います。どうぞよろしくお願いします！」

この半生で培ってきた営業スマイルを決める。

早速、俺は諸々の手続きを終えた今日からシルフ系列店のタمامシデパートで働くことになった。今回の一件が終わるまでは向こうの家の家賃は会社が全額持つてくれるらしい。だからしばらくはここでロケット団に目を光らせて過ごすことになるだろう。

今、俺の前では人事担当の人が説明をしてくれていた。

「よろしく。では悪いけど早速今日から働いてもらうよ。君はトキワ支店ではなにをやっていたのかな？」

「はい！・ むこうは社員が少なかったので大体の仕事は経験済みです。接客陳列配達事務と大体の業務はなんでもやれます！」

「ああ。そうなんだ。それは心強い。うちのデパートは配達の人手が足りなくてね。その上、君の代わりにトキワ支店に行った人が配達担当だね。中々屈強だったから穴を埋められるか不安だったんだが問題なさそうだね」

どうやら社長に言った俺の代わりにマツチヨを配置してというねがいごとは叶ったらしい。妻子持ちの癖に過ぎた願いを持ったその身を恨むがいい。

俺はそんな思考をおくびにも見せないで答える。

「いえ。そういうことならお任せください。自分は地元がタمامシなのでこの街は庭みたいなものですから」

これは事実だ。俺は生粋のタمامシっこ。近道裏道なんでもござれだ。

「それは助かる！・ でも今日は余裕があるからゆつくりで構わないよ。それと今後はセキチクやヤマブキ、もしかしたらハナダやシオン、クチバにも行つてもらおうかもしれないが……やれるかい？」

「わかりました！・ 自分は一度カントーを旅していたのである程度の街は行ったことある分大丈夫かと……では配達行ってきます」

俺は荷物を持ってからバイクに乗って大都会タمامシで風になった。街中では配達場所の距離も近い事もあつて流石にカイリユーは

頼れない。

ハクリューがカイリューに進化するまではむこうでもバイクで配達していたので免許は取っている。トキワの周辺の未舗装の悪路を進むことも多かったので技量も中々だ。

お店やオフィス、時には個人のお宅へと伺って、俺は遂に最初の配達を完了してデパートへと颯爽と帰還した。

「おおー・流石に言うだけあって早いね！ それじゃあ悪いけど次はお隣のヤマブキだ！ 頼めるかな？」

おかのした。俺は今度は熱いお茶を片手にヤマブキへと向かった。

タمامシデパート。これはカントー民ならご存知だろう。タمامシステイにあるカントー最大の商業施設だ。品ぞろえもカントー最高。ポケモングッズに限らず日用品なども取り扱いがごさいます。当然シルフの系列店舗の中でもその売り上げは最高峰だ。

そんなタمامシデパートには多くのお客様からの配達のお願いが殺到する。あんまりにも遠ければ運送会社に頼むが隣接しているセキチクとヤマブキ。そしてヤマブキに隣接する三つの街へは結構配達の間があるそう。どこも俺には馴染みのある街なのでバツチ来いって感じである。

俺は再びタمامシのようにヤマブキで風になり配達を済ませて行く。このままではいずれタمامシでの成績トップを取ってしまうだろう。ふふ。才能とは恐ろしい。

「すいませーん。タمامシデパートから配達に来ましたー。どなたかいらっしやいますかー？」

そして俺はヤマブキに数ある重要施設。そのうちの一つであるヤマブキジムへと来ていた。

今のジムリーダーはナツメだが、俺が挑戦した時は今で言う『かくとうどうじょう』がヤマブキジムだった。まあ彼女とは年齢も同じくらいだろうし仕方ないか。

(ちよつと残念だったなー。ナツメともバトルしてみたかった)

「あら？ そう思ってくれるなら嬉しいわね。私も昔から貴方のことは知っていたわ。なんならジム戦やるかしら？」

「うおっ!？」

黒い髪を長く伸ばしたどこか不思議な雰囲気をした美女が俺の言葉に反応して語りかける。

入口のワープパネルから出てきたのはまさかのナツメその人だった。てつきりジムトレーナーが出てくると思っていた俺は驚く。

「昔って……そのサイキックで？ 三年前から？」

「やっぱり私のことも知ってくれているみたいね。そして違うわ。普通に本やテレビで見たの。同い年の貴方がジムを勝ち進んでいくのはとても痛快だったわ……私たちやその前後の世代ではとても有名な。たったの一月でカントーのバッジを六つも取ったのだから。あの時はテレビの取材なんかも来たでしょう？」

「ああ見てたのか……でもよしてくれ。もう昔の話だ。今はただの素敵なショップの店員さんさ。あ、これお届け物です。サインいいですか？」

俺は照れ隠しに配達員のキャップを深く被って顔を隠しながら、注文の伝票を彼女へと渡す。

「私が貴方のサインを欲しいくらいだけど……はい。これでいいかしら？」

「はいどうも。サインの練習はしてないんだ。諦めてくれ。しかしコスメね。意外だな。まだ若くて美人なのに」

伝票をポーチへと押し込みながら話題を変える為に軽口を叩く。

彼女は後にポケウツドに進出する。それを考えるとまんざら分らないでもないが、彼女にはもつと俗世離れたイメージがあった。「あら、ありがとう。でも私も女ですもの。あなたが私にどんなイメージを持っているかわかるし、それが的はずれという訳でもない。けど、やっぱり興味が無い訳じゃないのよ？ それに……下手に未来が分かるから手を抜いたら将来酷い目にあう事がわかつちやっつね……」

彼女は両手で自身の体を抱きしめ顔を曇らせる。

「あー。なるほど。悩みのみらいよちもできる……というかしちやうのか。大変だなエスパーク少女」

「ええ。それと実はこうして人に任せずに直接会いに来たのは貴方のファンだからということもあるけど、なによりも貴方の未来がぼんやりとだけ予知できたからなの。これから貴方にはとある苦難とそして輝く道が待っているのが見えたわ」

ナツメは目を閉じてそう言った。そして「心当たりは？」と手を差し出して問いかけてくる。

とある苦難。こっちはロケット団との抗争だろう。やはり厳しい戦いになるのだろうか。しかし覚悟の上だ。

しかし輝く道……抗争で活躍して裏切り者の分空いた席に座り幹部昇進役員就任いいかんじ……って奴か？能力に見合わない昇進はあんまり気が向かないのだが。

まあ現状を考えるとこんな感じか。

「それを伝えるためにか。ありがとう。なるほど。心配はいらない。乗り越えて見せるさ」

「流石私が憧れたトレーナーね。頼もしいわ。でも気をつけて。その苦難は貴方の側に確実に潜んでいるわ。おそらく避けようがない。必然の苦難よ」

「覚悟の上だ。そいつらを振り払いに来たような物だからな。そっちも気をつけろよ。あいつらは俺が片付けるから。ああ、それとこれ美容関係のカタログ……当店のまたのご利用を心よりお待ちしております」

俺はそう言って一礼し、ジムを出た。

「そいつら？ 違うわ。貴方に立ちほだかる苦難は一人の人間がもたらす物よ。それも……」

ナツメは目を閉じて意識を集中する。

(見える……)

黒いシルエツトだがナツメには少しだけ既視感があった。和装の人物……それに周りには草木や花々のようなものが生えている。

「これは……女難？」
ナツメは一人ぽつりとつぶやいた。

四話

「今日も配達行ってきまーす」

「よろしくー」

今日も今日とてレッツ勤労。配達用の社用バイクを押して先輩社員に挨拶をしながら通り過ぎようとしたら、今日はちよつとした連絡事項があったらしく途中で呼び止められた。

「ああそうだ。今日はいつもと変わったところの荷物があるんだ。本当ならよほど特別な事情が無い限りは男子禁制なんだけど……今回は担当の子がいないって言ったら特別に許可をもらえたから大丈夫。だけどちゃんと配達員だと説明するんだよ。捕まっちゃうからね」

「ん？ どこかの女子寮かなにかですか？」

えーなにそれーちよつとテンション上がるー。あかいバンダナとか巻いていこつかなー。

「いや。君も知ってるだろう。タمامシジムさ。そのポケモン用のポケモンフーズ。お願いね」

「タمامシジム……」

タمامシジム。今日俺は人生で初めてその場所に行くことになったのだ。地元民なのにね。行ったことないの。

俺の旅はタمامシをサイクリングロードに出て、セキチクシティからクチバ、ヤマブキ、シオン、ハナダ、ニビ、トキワ、マサラ、グレン。そして最後にタمامシでラストのバッジを獲得するという手はずだったからな。グレンに行けずにマサラで止まってしまったけど……。

まあこういうこともあるかと考えをやめ、メットを被ってデパートから出発した。

俺は教習所仕込みのドライブテクでタمامシの道もすいすい進んだ。邪魔な細い木は普通に引っこ抜き、近道でジムに着く。

「よいしょつと……」

配達用のバイクを邪魔にならない所に駐車して、依頼された荷物を抱えてジムへと歩み寄る。

「ふう……流石に重いな……こつちにいる間に車の免許とるかなこりゃ」

本日のお届け物は草タイプ用高級ポケモンフーズ。バイクで運べはしたがかなりの量だ。本来なら車で運ばないと危ない重さだろう。流石はお嬢様ジム。どうも予算が違うらしい。

「すいませーん。タمامシデパートから商品の配達に来ましたー。手が塞がってるので扉を開けてもらってもいいですかー?」

「はい。今開けます」

インターホンをなんとか押して配達に来たことを伝える。するとジムの中から女性の声が聞こえる。どこか聞き覚えのある声だった。

「はい。確か配達員の代理の方ですね? ご苦勞様で……」

「あ……えーつと久しぶり……です……」

その声の持ち主を思い出す前に、俺の前に出てきたのは和服を纏っていたいかにもお淑やかな雰囲気のお嬢様……名前はエリカ。

タمامシジムのジムリーダーのエリカであり、トレーナーズスクールタمامシ校の俺の同期であるエリカだった。

「……少々お待ちください」

「えっ」

エリカは容赦なくジムの扉を閉ざした。それから一分ほど経った。

(えっ。自分では開けられないから呼んだんですけど?!)

持ってるポケモンフーズこれ一つ百キロくらいあるんだけど? それを俺は両手で複数持ってるんだけど? 高級品だから一度地面に置いて傷でもつけて返品されたら損害が!

手が塞がっているのでドアを開けることは不可能。俺はそれからつちもさつちも行かなくなり、結局二分動かなかつたら閉ざされた扉は開いた。

(このまま うごかず ふたつのときを まで)

俺は白目になりかけながら耐えたのだ。褒められてしかるべきだと思っ。

「ちよつとー。そこに立つてられると邪魔なんですけどー。覗きならジュンサーさん呼びますよ?」

中からはジムトレーナーであろうミニスカートが出てくる。褒めてくれなかった。むしろ邪魔者か犯罪者扱いだ。いやそれはどうでもいい。助かった。俺をこの苦痛から解放しておくれ。

「つてあれ？ エイジユ先輩じゃないですかー！ 私です！ スクールで先輩だったアコです！」

口の中を噛み、なんとか意識を保ちながら、そう言う彼女の顔を確かめる。確かにこちらも見覚えがある。数年見ない間に成長したのか記憶と若干違う姿な気もするが、記憶の彼女はジムトレーナーが十分務まるだろう才能だったので間違いないだろう。

「おおアコちゃんか。大きくなったね。久しぶり。俺は今日ちよつと仕事で荷物を届けに来たんだ。ポケモンフーズなんだけど、どこに置けば良いかな？」

「あー。いつものマツチヨなお姉さんじゃないからなんだと思いましたがよー。どうぞ先輩！ こちらです！」

マツチヨなお姉さん。まさか俺の願いと店長の願いが両方叶うルートがあつたのかと驚嘆しながら、俺は早足で彼女の背中を追ってなんとか苦役から解放された。俺も筋トレはしているが終わりの見えないそれはまさしく苦行だった。

「ふう……」

「先輩お疲れですねー。お水どうぞ。おいしいみずですよ」

「ああ。ありがとう」

俺はもらった水を飲み干す。さらに自分のポーチからプロテインを取り出す。今日はバイバニラ族が描かれた物だ。それで一息つく。俺はほんの少し休もうと決めた。なんとたつて腕が震えている。このままでは絶対に事故る。

すると後輩のアコは気後れせずに俺に話しかけてきた。どうやらこの子には数年ぶりにあつた友達とどうにもうまくお喋りできないみたいな現象は発生していないようだ。

「それで一体どうしたんですか？ 確かどこか遠くの街のフレンドリイショップでお仕事をしてるんですけどよね？ どうしてこちらに？」

なんで知ってるのお？俺ただの店員さんなんですけどー。

若干の情報漏えいの不安を抱いたが、まあ真実は女の子の情報網はあなどれないと言っただけだろう。トキワのショップでも口コミで流行った商品結構あるし。まあそれはあそこが田舎寄りだということ事も多分にあるだろうけど。

「ああ。最近ロケット団で世間が騒がしいだろう？ だから系列店で強い奴を集めて人員を振り分けたんだがその関係で俺はトキワからタمامシに異動になったんだよ。今はデパートで働いてるから是非買い物に来てくれ。まあ俺は配達担当だからあんまり店にいないけど」

そうやって笑う。しかし自分で言っけて今更気づいた。

そういえば俺の本懐は店舗の防衛なのに配達に回されているというのは若干妙であることに。

俺のことは人事にも伝わっているはずだ。配達の人手が足りないのは事実のようだが、それでもずっとこの仕事に振り分けられるのはやっぱりちよつと妙だ。というか余った時間でチラシの投函とかさせられたし。

確かに地域の巡回も警備としては悪くはないが……デパート配属の他の対策班の奴ら（全員ロケット団判定黒かグレー）は内勤だ。

（つまり俺はデパートの警備から遠ざけられている……？）

もしかしたら既にこっちにもロケット団が紛れ込んでいる可能性があるのか。急いで調べる必要があるな。

そんな不穏なことを考えている俺の気も知らずに、後輩はのんきに世間話を続ける。

「なるほどなるほどー。最近物騒ですもんね。エリカ様もなにかここしばらくはお忙しいそうで今日は特にお化粧のノリが悪いって嘆いていましたもん。あつ！ これ内緒ですよ？」

「どうせ話す機会もないよ。昔は同じ学生だったが……今はジムリーダーとショップ店員だ。立場が違う。ああ、ジムリーダーというところういえばこの前ヤマブキに行った時にナツメにあっただけけど彼女もなにかコスメ買ってたな」

「そんなことないですよ！ 先輩はいつでもすごいですって！ ところでナツメさんって化粧品なにを使ってるんですか？ あの人もエリカ様くらいお綺麗ですもんねー。気になりますー！」

「あー確か……」

俺はそんな世間話をしながら酷使した筋肉をほぐしていた。そしてようやく調子が戻ってきたので俺は彼女に別れを告げてジムから出たのだった。

「じゃあなアコちゃん。当店のまたのご利用をお待ちしております」

「あはは！ もうすっかり店員さんですね。はい先輩！ またご利用しますよー！ 今度はポケモンバトル見てくださいねー！」

俺は再び配達の仕事へと戻ったのだった。

(急いで調査しなければ)

ロケット団の野望と戦うために。



エイジユが去った十数分後。タمامシジム。

「エイジユさんは!？」

急ぎながらも上品さを損なわない駆け足で、彼女は先程去ったタمامシジムの扉の前へと戻ってきた。途中で出会ったトレーナーに対応を任せたが流石に時間を掛け過ぎたという焦りもその顔からは窺えた。

「あ、私が応対しておきましたので先輩ならもうお帰りになりましたよエリカ様。それにしてもずいぶんと気合の入ったお化粧してますね？ もしかして何かお話しすることがあったのですか？」

ミニスカートのアコはエリカに向けてニヤニヤと笑う。本来ならジムトレーナーがジムリーダーにするのはとがめられる行為だが、二人は同じスクールの先輩後輩という親しい仲なので許されていた。

「そんなあ〜」

しかしエリカはそんな彼女のおふざけも無視してその場で崩れ落ちる。

「……私もう今日はふて寝します。ちよつとうとうとどころではない本気の眠りです。今日は臨時休業しましょう……もういつそのこと三日くらい休みましょう」

「ええっ!? ダメですよ！ 今日ジムに挑戦者の予約が入っているんですからね！ 午後からは生け花教室の授業だつてあるじゃないですか！ あと寝るならそのお化粧落としてください！ ああもう手伝いますから！」

タمامシシテイ出身の名家のお嬢様であるエリカ。

現在の彼女は優秀なジムリーダーであり、タمامシ大学でも教鞭を執る人気講師でもある。容姿も端正であり振る舞いも品行方正、内面もその出自や容姿に劣らない大和撫子っぷり。カントーの大都市にふさわしい人物である。

彼女のことを聞けば、誰もがタمامシが誇る最高のトレーナーと答えるだろう。

だがしかし。彼女からしてみればそれは大きな間違いである。

(せつかく八年ぶりにエイジユ君とまた会えたのに。全くお話できなかった……)

エリカはその男に並ならぬ感情を抱いていた。

時は十年ほど前に遡る。タمامシにあるトレーナーズスクール。そこに幼き日の彼女らの姿があった。

「おとうさま、おかあさま。わたくしががんばりますわ」

一方は当時からその家柄や教育もあつて既に才女との誉れ高かつたエリカ。

「やったー！ 入学だー！ 受験からの解放だー！」

もう一方は一般家庭の出自で特別な教育は一切受けていない、しいて言うなら親の愛は存分に受けたのと背が高めなことが取り柄の男児エイジユ。

二人を比較すれば月とスッポンとまでは言わないが、その間には確実に大きな隔たりがあると誰もが考える。実際に始めは誰もその二人を比較なんてしなかった。

しかしスクールが始まって蓋を開けて見れば——常に頂点はエリカではなくエイジユの手にあった。

(ナゾノクサのタイプはくさとどく……ギャラドスはみずと……ドラゴンかしら?)

(コイルのタイプはでんきと……あれ? もうはがねタイプって発見されてたっけ? いやはがねも書いとけ)

筆記は常にトップを二人で争う。互いに時々ミスがあつたので入れ替わりが激しかった。通算すれば多少は偏りもあるだろうがほぼ互角だった。

「ええと……ガーデー! たいあたり! え? おぼえないのですか!? どうしましょう……! みずタイプには不利ですけど……かえんほうしゃ!」

「おっ! 今日はヤドンか! よろしくな! バトル勝とうぜ! めいそう! 続けてみずのはどう!」

バトルなどの実技では差があつた。こちらではエリカは直接対決したらほとんど勝てなかつた。

無論、エリカ自身はその子供から群を抜いた知識、歳にそぐわぬ冷静さで他を圧倒する実力を持っていた。しかしエイジユは他を隔絶した実力を持っていた。知識は最新を超えていたし、実戦でしか培えないような戦闘の流れを読む力も最初から持ち合わせた。

何よりも彼のその根柢不明の自信と余裕がポケモンにも伝搬したのか、実力以上の力を発揮し、彼の指揮下では授業中に進化を始めるポケモンも多かつた。自分のポケモンでもないのに熱心に世話をしていたのでポケモンたちに特別懐かれてもいた。

エリカはバトルで白旗を揚げた。これはエリカに限らず全員だ。教師すらも彼に教えを乞うていたのを彼女は知っていたし、エリカが悩んだ時に真っ先に助言を求めたのも彼だった。というかスクールで使われている教本は今でも当時彼が作った物が抜粋して使われているし、彼女のジムも参考になっているほどだ。

「わたくし、エリカは生徒会長に立候補します!」

彼女はバトルは諦めて学校政治で勝ちを狙いに行った。政治と言っても可愛いもので、積極的に委員長や生徒会長を目指したのだ。それでも彼女は負けた。正確に言うとな勝敗などはなかったが彼女は確かな敗北感を味わった。

「ごちそうさまでした！ よっしや！ 昼休みにポケモンのところ行く人このゆびとーまれ！」

「俺も行くー！ 今日こそ勝つからなエイジユ！」

「僕だって二人には負けないよ！」

「エイジユくん。わたくしもよろしいですか？」

「OK！ みんなついてこい！」

「あたしもー！」

「ぼくもー！」

「うう……わたしも行きたいけどマトマのみのサラダ食べ終わるまで行っちゃダメだって先生が……」

「あー。マトマのみトマトっぽい癖にからいもんな。よし！ こっさり持つていこうぜ。大丈夫。ポケモンは結構マトマ好き多いから」

「でも先生に怒られちゃうんじや……」

「その時は俺がどろぼうしたって言うから大丈夫。でもこれは二人だけの秘密な」

「うん！」

エイジユはトレーナーに必要な素質、他者を率いるという行為を自然にこなした。加えて個人的な性根として兄貴分的な気質でもあったのか、あつちにぼつちがいれば仲間を誘い。あつちにいじめっこがいれば鉄拳制裁。あつちに勉強が遅れている子がいればつきつきりで教えてやり。あつちに泣いている子がいれば慰めに行くと、とにかく面倒見のいい少年だった。

確かにエリカは優等生だったがし、事実として多くの生徒に慕われたがエイジユには勝てなかった。というかエリカもエイジユを慕っていた。上の回想にも普通に混じっている。

しかし、聡いエリカはエイジユから特別な感情を向けられていない事を理解していた。どこまでも単純なその事実を以って彼女は負け

を認識した。

そのまま時は過ぎたので当然だが最終成績も首席エイジユの次席がエリカ。卒業までの間を夫の後ろを三步遅れて進む妻のような状態だった。

その結果。

(私はきつとこのまま彼のお嫁さんになって彼の背中を追いかけていく人生を送るのでしよう……うふふ)

スクール卒業前には既にエイジユに徹底的にぼこぼこにされ過ぎたせいで世間一般の恋愛からはかなりズレた惚れ方をしてしまった。

今まで良家の人間として人の上に立つべきとの教育をされたエリカには、同世代で常に自分の上に立ち続ける男は劇薬だった。

「タمامシ大学卒業式！ 卒業証書授与！ 卒業生代表は首席のエリカさん！ 卒業おめでとう！ これからはこのタمامシシティのジムリーダーとして頑張ってくれ！」

「はい」

何度も言うがエリカは優秀だ。事実スクール時代はエイジユを除けば生徒間では無敗。実力は教師にも匹敵し、その後はタمامシ大学の推薦ももらって進学、そのまま大学の卒業を待たずに縁故など一切なしの実力のみでジムリーダーになって首席で卒業。

まあ進学した先の大学で、エイジユがスクール時代に筆記試験の答案に正解では無く、当時未発見の真実を書くので度々失点していたというところを、進学したエリカは知ってまた打ちのめされて好感度が増すのだが、これは余談だ。

くだいようだが、彼女は相対的にも絶対的にも間違いなく才女と言えた。言えたら言えた。

事実、本気を出した彼女に勝てる人間は今でもほぼおらず、ジムリーダーとしての職務以外での敗戦は皆無と言って良かった。

それほど才気あふれた彼女をことあるごとに土をつけまくったのは後にも先にもたった一人。

エリカはスクール時代は彼に勝つために常にエイジユを見ていた。それこそ平日休日の別なく四六時中といていい。運よく別宅が彼

の家の隣にあったのも大きいだろう。真面目なエリカはその几帳面さからストーリーカー顔負けの入念な観察をした。いや、してしまった。すると人間不思議なもので、はじめは意識していなくても気にし出したら早く。なんとなく目で追うだけでも思春期には十分だろうに、さらに相手に詳しくなりすぎて謎の親近感までが発生。というか実際に同じ学校の同じ学年同じ秀才クラスにいたので近しい関係。名前もエからなので席もお隣。とうにお膳立ては整っていた。彼の人となりを知り、その姿を眺め、時間があれば彼について考え、そして時折話したり触れあったりもするわけだ。

結果として——愛は凄まじい速度で育ったのだ。だがエイジユからすれば。

「エリカ？ ああ生徒会長ね。原作キャラだしあんまり近づかないほうがいいだろうな。それにどうせ彼女がジムリーダーになる前にバッジは取るつもりだし……」

認識はこんなものである。クラスメイト以上の感情がそもそもないのでやっぱり特別扱いはされてなかった。

(きつとすぐにチャンピオンになり、故郷に凱旋。そして彼は白馬に乗って私を迎えに来て。二人は永遠に結ばれるのですね……)

彼女は当時本気でそんなことを思っていた。なんなら今も思っている。

実際にテレビや雑誌では異常な速さで地方を攻略していく特異な少年として取り立たされていたエイジユ。インタビューにもこれと言って答えなかったので謎多き天才とも呼ばれていた。

それをエリカは、

「ああ。私を少しでも早く迎えようとしてくれているのですね。そんなに急がなくても私はどこにも行きませんのに。うふふふ」

などと解釈していたほどだ。ジムがお花畑ならば頭もお花畑である。

「いやっほおおー！ たーのしー！」

なお実際は彼は旅が楽しくてたまらなかつただけである。おもしろい本を読み進めるように早く先へという欲求だけが彼を動かして

いた。

「船酔いって……船酔いって……」

その後、彼がリーグ挑戦を諦めて失意の帰郷。ちよつとグレたりもしたが、すぐに普通にフレンドリイシヨップに就職した時には多くの者が残念に思ったし、勝手に彼に失望するものもいた。誰よりもその才に接してきたエリカもそのどちらかかと思いきや。

（構いませんわ。二人のあかいいとはそんなことで断ち切れるほど細くはないのです。なんなら私が養って差し上げます）

もうその恋慕は揺るがなかった。がんじょうの極み。剥がれないばけのかわの如し。かつての弱点なしだったゴースト・あくタイプがふしぎなまもり持って来たレベル。

ちなみにフォローするとフレンドリイシヨップの正社員の給料はそんなに安くはない。お嬢様からするとちつぽけだが普通に一家族が生活するに十分である。末端でもシルフカンパニー傘下なのだ。

（ああ……会いたい。この前は幸運でした。まさか実家に戻っていたエイジユくんを一目見れるなんて。すっかり背が伸びてかつこよくなってきましたね。そうですね！ 今度からデパートへの配達依頼を増やしましょう！ 配達員の指名ってできるのかしら？）

ちなみに彼が実家に戻った時に感じた視線は彼女の物だ。彼の部屋から見える武家屋敷はエリカの実家の別宅である。

そんなこんなでエリカは少々変わった馴れ初めとはいえ間違いないくエイジユに恋をしているのだった。

五話

俺がトキワから異動しておよそ一月経った頃。

今日は晴れていたのに急に雨が降ってきたのでその辺にあった軒先で雨宿りをしている。

後から髪がすっかり白くなったお髭が立派な男性も同じ様にやってきて、お互いに「いやー急でしたなあ」などと二人で己のちよつとした不運を共有していた。

周囲に誰もいないことを確認した後、俺は男へと資料を渡した。

「……これが調査結果になります。どうぞ」

「ありがとう。むう……本社にいくらか内通者がいるだろうことは承知の上だったが、まさかタمامシデパートにまでロケット団の手が迫っていたとは……」

そうだ。俺は今ヤマブキシテイのとある路地で社長と落ち合っていた。社長も簡単な変装をしているし、俺もキャップを深めに被っている。

この世界は盗聴尾行の対策も苦勞する。具体的に言おう。エスパークタイプとかいうズルは今すぐやめろ。即刻停止しろ。やっちなえあくタイプ！

さて、間諜対策としてこの場では、上空にはカイリユーが空を舞い、でんじはで機械系を妨害。頭上の建物の間にはストライクが待機しつつ、しんぴのまもりやひかりのかべで俺と社長をエスパークの探知から守護。地下にはニドキングが潜伏してあまごいで足跡や匂いなどの物理的な痕跡を軽減。下水道にはベトベトンが控え、くろいきりで視覚での発見も妨害、あくしゅうでポケモンを遠ざけている。万全だ。この密会がばれる心配はないだろう。唯一残る択である直接見つかるという場合も俺とポケモンがいるし、既に社長が逃げるルートもいくつも用意済みだ。

そして今、社長へと手渡した書類はタمامシデパートに関しての調査資料である。そこにはかなりの人数がロケット団との関連と見られるという事を書いた。

「実際に足を運んで調べたところ、なぜか長時間ゲームコーナーに通っている社員が多いですね。あそこはロケット団のアジトがありますから、おそらくはこの見立てで間違っていないかと思われます」「なんと！ ゲームコーナーが……!? いや、ロケットゲームコーナー……そうだったか。まさかあのサカキくんがロケット団のボスだったとは……！ 取引をされていて優秀な男だと思っていたが、まさか会社ごとあのボールを奪おうなどと……やられたよ」

そういえば普通はゲームコーナーがアジトだとは知らないのか。まあどうして知っているのかと追及されたら調査の結果とか誤魔化そう。知りえた方法はともかくとして、ゲームコーナーがアジトだという情報、それは事実だ。

そしてサカキはどうも表の顔を使って上手い事社長を騙していたらしい。確かに多くのポケモン世界でジムリーダーとロケット団首領になんらかの企業の社長を両立できる男だからな。その能力はここでも疑いようがない。もつとも、その力をもつと綺麗に使ってくればと思わずにはいられないところだが……。

さらに言えば狙いのあのボールとはマスターボールのことだろう。あれはこの世界で生きていたらわかるが恐ろしいボールだ。どんなに強いポケモンだって捕まえられるというのはとても大きな意味を持つ。

(もしもあの時に……)

ifの考えに浸りそうになったがそれをなんとか留める。あれはあれで良い思い出だ。

「どうしますか？ デパートはまだなんとか一般社員の方が多いです。すぐに信頼できるものを集めて少しづつスパイを更迭する事は可能かと」

俺の提案に社長は否と答えた。

「それだと間違いなく奴らに気づかれるだろう。おそらくだがタマムシ警察の上の方にも団員か賄賂を貰っている者がいるはずだ。それに奴らは資金も潤沢だろう。すぐに出所してくるのは見えている。根本的な解決には至らないだろう」

「警察までですか……！ でしたら……どうしますか？」

俺は尋ねる。自分一人なら突入！制圧！って感じだが、俺はショップ店員。俺の行動は場合によっては会社への被害が出かねない。そうでなくとも後先も考えずに無茶をするには家族も近すぎる場所にいる。

サカキの性格から逆算すると人質を取るかと言うと確率は低い。部下がそれをしないと断言できない。この前の会議の時点で既に末端人員の無能がチラリしていた。ああいうのが勝手に暴走して組織の株を下げたり、冷蔵庫に入った写真を撮って炎上するのだ。まあSNSどころかまだ携帯電話ポケギアすらないけどねこの世界。

社長は少しの逡巡をした。

「ううむ。いくら君でも一人だと難しいだろう？ かつて全地方でも史上最速で六つのジムを制覇したタママシティのエイジユくん。シルフカンパニーはリーグを運営するポケモン協会にも協賛しているからね。あの時はよく君の名前を耳にしていたよ。だが、まさか私の会社、しかもフレンドリイショップの方で仕事していたとはね。驚いたよ。君ならば本社に勤めることも容易かったろうに……」

「社長。よしてください。買いかぶりすぎですよ。俺はそこまで上等な人間じゃありません」

キャップをさらに深く被って顔を隠す。社長も俺のことは知っていた。

俺が話題になったのはもうずいぶん前のことだというのに……しかしその経歴があるからこそ、こうして信頼を得ているのも事実だった。昔取った杵柄というやつか。

「ですが……やれとおっしゃられるならやり遂げてみせます。シルフの崩壊はそのまま俺の働くフレンドリイショップの崩壊にも繋がります。俺は店員として働いたのでわかるんです。多くのトレーナーとポケモンたちにはシルフカンパニーもフレンドリイショップも必要です。ロケット団に渡すことはできません」

幸いなことに手持ちのポケモンは勿論、俺もあの旅から腕を鈍らせているつもりはない。

それにいざとなれば何人か泣きついたら助けに来てくれそうな頼れる大人も俺は知っている。シバとかも誘ったら顔を隠すマスク持って参戦してくれそうだし。あいつなら最悪生身でもポケモンと闘える。「……頼もしいな。だが、今はその気持ちだけ受け取って置こう。君も、そして君のポケモンたちも。会社を預かる者として私の会社のせいでその身を危険に晒すわけにはいかないのだ。今、私は遠方に配置されたこちら側の人員を少しづつ戻しているところだ。人手が揃い次第手を打とうと思っている。それまでは辛抱してほしい」

社長にも既にあの対策班のほとんどが敵だと伝えている。あんな奴らだが、おそらく経歴は詐称していない。実力自体は本物で、数が負けている以上はちよつと人手が増えたくらいでは焼け石に水だろう。しかも数的不利は覆せないところにまで来ていると俺は見ている。

(勝つには圧倒的な質による蹂躞。どこぞのボスが好きそうなシチュエーションだな。まったく)

内心では反対だったが、かといつてまともな反論はできないし対案もないので、俺は社長の言葉に頷いた。

「それでは自分もしばらくは調査に徹します。何か動きがあればまた報告の場所を用意します。連絡方法はまたポケモンにメールを持たせて社長室かご自宅へ行かせますので」

「ありがとう。君がいてくれて本当に助かっているよ。やはり君は信用できる。もしも有事に遭遇した場合に限っては、こちらの指示を待たずに独自の判断で動いてくれて構わないよ」

まさかの条件的な全権委任をされてしまった。ありがたくいただいしておく。

「わかりました」

「では私は社に戻る。秘書が誤魔化してくれているとはいえあまり長く空けて怪しまれてはいけないからね」

くれぐれも無茶だけはいけないよ。最後にそう言った社長の顔には疲れが垣間見えていた。人に無茶をするなど言って自分は無理しているのだろう。

「ああそれと……これは私のわがままかもしれないが。一つ頼みがある。もしタمامシのゲームコーナーで——」

そして最後に一つの約束を交わすと、ちょうど雨が止み、俺たちは別れた。

（わかりました。しかし社長の様子が………これではできるだけ早めに片をつけないと社長が病気で早期退職してしまう）

正直、今までは偉いから従っていた側面も否定できなかったが、今回のお喋りで個人として好きになってしまった。あれが処世術なのだろうか？ ずるいなあ大人は。

（ああ……頑張るか。俺はフレンドリイショップの店員だからな）

俺はタمامシに戻りながらどうにか早期に決着を着ける方法がなにか考えた。

だが、その考えが浮かぶよりも、チャンスは思いの外早く回ってきたのだった。



それから数日後。

『ポケモンが暴れてるぞー！ 逃げろー！』

朝のトップニュースが飛び込んできた。人々が逃げ惑う映像がテレビに流れる。こうなったら一週間くらいはこればかりだろう。こういうのもどこの世界でも同じなのだ。

肝心のニュースの内容に振れる。

それはとある日の夕方に事件は起きた。タمامシシティのゲームコーナーがある通りで野生と見られるカイリユーとニドキング。そしてもう一匹、なにかかくとうポケモンが暴れているという通報があった。

実のところこの世界ではそういう事件はよくある話だ。しかしそれは自然の多いところの話。タمامシなどのような街中ではわりと珍しい。だがそれは起こった。

その事件では、いきなり建物の壁を突き破って入ってきたカイリユーとニドキングが客には目もくれずに暴れまわり、スロットマシンや設備をひたすらに破壊しはじめたそう。後の現場検証でわかったことだが、その施設はロケット団というポケモンマフィアとの関連性が強く、店側は表だつてすぐに警察も呼べず、事件の鎮圧が後手に回ったらしい。その時は地下に潜んでいた組織の連中が慌てふためいて鎮圧に出てきたそう。

「やなかんじー!」「にゃー!」

そこではロケット団らしき人物が天井を突き破ってその夜の一番星になったり。

「くそー! こいつら強いぞ! あいつらの群れのボスか!? もつと下にいる奴らを呼んで来い!!」

大勢のロケット団が現場に詰めかけて、まだ避難中の一般客もいた事件当時のゲームコーナーは阿鼻叫喚の空間に成り果てていたそう。

その裏で景品交換所でも、かくとうタイプと目されるポケモン?が負けず劣らず暴れていたという。

「うおおー!」

「ひいひい! うっ……!」

「たすけてー! 変なゴリキーが! がはっ……!」

そのポケモン?は受付にある仕切りの壁を拳で破壊し、そこに座っている胡散臭い男を殴って気絶させた後に外に放りだした。それから壁に掛けられていた鍵を使って景品として閉じ込められていたポケモンたちを解放したというのだ。

「お前ら逃げるんだー! あっ! やばい! 監視カメラある! オラあ! ぶっ壊れる!」

そのポケモン?はロケット団に捕らえられていた稀少なポケモンたちを逃がした。監視カメラに気付いてそれも破壊していたことから知能が高いポケモンだと専門家は見ているらしい。

「えーとこれとこれとこれは回収して……データも抜いて……お!

いいもの見つけ。前に修行した時に教わった使い方……試してみるか！ よし回収完了！ あとは椅子でも差しちやえ！」

そこからはこれまた現場検証でわかったことらしいが、そいつは柵を倒して景品を壊し、その場の端末にも椅子を突き刺してこれも念入りに破壊していたらしい。監視カメラの録画記録もその端末に入っていたらしく、おかげで景品交換所の捜査は難航しているようだった。

「うおおすてみタツクル！ 邪魔だどけ！ メガトンパンチ！」

「ぐえ！」

「あが！」

「二人とも！ 新鮮なフエンせんべいよ！」

「ぱくり！」

その後、謎のポケモン？は隣のゲームコーナーに窓から侵入。手近なロケット団を殴ってから暴れるポケモンたちの口になにかを投げ入れたら二匹は大人しくなったという目撃者の証言があったそうだ。おそらく野生とはいえ相当なレベルだと推測されている。

「はかいこうせん！」

しかし、大人しくなったと思ったら今度は人がいるのにお構いなしではかいこうせんを放ち、背中側の壁以外を完全にぶち壊して、脱出。「もひとつはかいこうせん！ そして全部持ってけ！」

続けて景品交換所にもはかいこうせんを放つてから、景品交換所から持ち出していたと見られる大量のけむりだまを使いそれに乗じて逃走。その煙が晴れるころには遠い空に逃げた龍が見えるだけだった。

警察の見解ではおそらく犯人はその団体が景品として不当に捕獲していたポケモンたちが所属していた群れのボスで、市民への影響は少ないと発表した。ただ念のため景品交換でポケモンを手に入れた人たちには警察への連絡をするように呼びかけているらしく、同時に逃げた方向から考えてハナダ方面でカイリユウやニドキングの目撃情報を集めているらしい。

そしてロケット団の方への対応だが。多くの団員の逮捕に成功し

だが、一部が逃走に成功したので街中の警備の強化を宣言した。

そんな話が朝のニュースで取り上げられていた。いやあ昨日は大変でしたねえ。

母がそのニュースを見て、俺に言う。

「あらいやだ。物騒な話ね。エイジユちゃんも気をつけてね?」

「俺はゲームコーナーとかは行かないから大丈夫だよ母さん」

「ごめん嘘。めつちや行つてた。結構勝つたから出費は少ないけど。でももう行かないから大丈夫。そもそも店が物理的に潰れたし。」

「そうね。そういうえば昨日は遅くまでパソコンを使っていたみたいだけどお友達とお話?」

「いや……ちよつと慣れない作業してたら遅くなっちゃって。もうしばらくは使わないから大丈夫だよ」

「ずっと……」

俺は延々と流れるそれを一家団欒の朝に朝食を食べながら横目で見ると。

(まあ……うん……暴れたの俺なんだけど)

事の真相。

当日、俺は仕事が休みなので日課になっている変装してロケットゲームコーナーで客の振りをその日もしつつ、そこで奴らを張っていると、見覚えのあるイーブイを連れた少女が目に入ったことから事件は始まった。

(あれは確かアユミちゃん。一月でタمامシまで来たか。中々やるな。流石主人公だ)

そんなことを思っていたら少女は肩から降りたイーブイを追って奥へと入って行った。

(オイオイオイ何やってんだ!)

俺が怪しまれない様にそちらに向かうと彼女の姿が既になかった。ポスターの前にはいるはずのロケット団のしたっぱもいない。サボリやがって。ざけんな。

「まさか中に入って行っただのか!？」

既に調べていたポスターの裏の開閉装置が使われた形跡がある。俺の推測は間違いないだろう。

(あの子勝てるのか? もしも負けたらおこづかい半分じゃすまないぞ……じゃあない。この機会にこっちもやるか!)

俺もポスターのスイッチを押してボールからポケモンを出す。

「ストライク! ベトベトン! 潜入して赤い帽子の少女がロケット団にやられないように隠れながらフォローするんだ! 終わったら見つからない様に家まで帰ってきなさい!」

「しゃー!」

「べ〜!」

俺は隠密に長けた二匹を少女へと付けた。最悪の状況でも奇襲でサカキから少女を救い出してくれるだろう。

「こっちは派手に暴れるぞ!」

俺は店の外へと出た。

それからはニュースの通りだ。残る二匹にげきりんとかあばれるを命じて陽動を任せ、アユミちゃんの方から目を逸らさせた。俺自身も不当に捕まっているポケモンの解放と記録の奪取を行って施設を破壊して逃亡に成功した。

そして謎のポケモンは俺だ。服を脱いでパンツ一丁になつてから適当にチョークで体に模様を書いて、変装用に持って来ていたゴーリキーマスク(シルフ製? 1050也。お求めはタمامシデパート売り場まで)を被って暴れただけだ。筋肉は全てを解決する。

そしてけむりだまの煙に紛れている間にニドキングのあなをほるで退路を確保、逃げる直前にはカイリユウにりゅうのはどうを空へと撃たせ、視線と意識を誘導。そのまま地中から足が付きにくいタمامシシテイ近郊に脱出したというわけだ。

何の因果か捕まっているポケモンの中にはニドリーノ、ストライク、ミニリユウが含まれていて俺の手持ちが同族の解放に情熱を燃やしてくれたのでともうまく行った。正直暴れすぎて俺は瓦礫で生き埋めになりそうになったが、アユミちゃんの方は手持ちのあなをほ

るで怪我も無く無事に脱出できたみたいなので結果オーライだろう。(ポケモンも逃げ切ったようだしデータも回収した。アジトと資金源の一つを潰した以上はサカキも悠長にしてはられない。間違いなく早急にシルフ乗っ取りに出るはずだ)

俺はロメのみが描かれたちよつと高いプロテインを一息に飲み干した。昨日のごほうびだ。

「じゃあ行つて来るよ」

「あら？ 今日はいわね？」

「あんな事件があつたばかりだからちよつと本社に呼ばれててね。いつてきまーす」

俺はここ最近何度も通っているヤマブキシテイへと向かった。

道中のゲートの係員がお疲れの様子だったので持っていたあつちいおちやを渡すと彼は快く通してくれた。やつと役に立って俺も嬉しい。冷めたおちやを何度も消費するのは悲しかったのだ。

どうやら最近の騒ぎで彼らも忙しいようだ。もうすぐ解決すると思うから待つていてほしい。

そして今度は迷うことなく社長室に時間通りに辿り着く。

そこにはこの前集まった人間とは別の新たな一人の男がいた。そいつはどこかで見たような水色の短髪の男だった。

「全員集まったようだ。私はアポロ。今回の対ロケット団対策班の統括を務める事になった。よろしく」

ああ！こいつロケット団ですよプレジデント！と俺は声を大にして叫びたかったが自重した。もう幹部級を潜伏させているとは本当に驚いた。確かにこいつはカードキーを所持していたがそういうことか。

「アポロ統括。何人か見当たらないのですが？」

一人が手を挙げて質問した。見当たらない顔には確か前にトキワうんぬん言っていた奴も入っていた。

「ああ。彼はポナヤツングスカ支店へと異動した。他の者は先のタマムシの事件を筆頭に各地の小競り合いで負傷をして療養している。みんなも気を付けてくれ」

(飛ばされたのあいっだな。というかポナヤツングスカ支店実在したんだ……)

そしてアジト襲撃は敵の数を減らすのに大いに役に立ったようだ。思い返せば確かに数人ほど顔見知りもいた気がする。

「さて。質問は以上かな？ それでは新たな編成を私から発表させてもらう」

そうしてアポロから発表された編成は要約すると以下の通りだった。

まずは騒ぎのあつたタمامシと本丸であるヤマブキの警備を強化。それ以外に配置されていた人員は軒並みどちらかに集中させるとのことだ。

俺は変わらずタمامシ配置となったが……どうするか。

まず第一にどう考えてもヤマブキにいた方が都合はいい。あんな騒ぎがあつたせいでもタمامシではどこも警察やジムリーダーやジムトレーナーを筆頭に有志が警戒にあたっている。そんな中で騒ぎを起こすほどサカキは馬鹿じゃない。タمامシは安全だと結論を出しても問題ない。

その会議が解散してからも俺は考えた。ここは完全にロケット団に侵入された。イベントは遠からず起こる。社長にも報告を急がないとならない。

(事件が起こってからだと遅い。アジト襲撃はこちらから仕掛ける能動的なイベントだったがシルフ襲撃は逆にあちらが始めるこちらが受動的なイベントだ。出来る限りそれが起きた時点で内部に侵入しておかなければ都合が悪いだろう)

つまりタمامシに配属されている限り、俺が本社を守れるとは限らないというわけだ。

いれば絶対に防衛するとはまでは言わないが、社長室くらいなら安全を確保できる自信はある。社長とマスターボールは死守できる。

ただこの世界はどうにも出典がごちゃ混ぜな感じで、サカキ自身はゲーム以上にポケスぺに近い感じだがロケット団にいるジムリーダーはサカキだけだし、リージョンフォームもニビあられもあるの

に、あのゲームコーナーではまだ初代と同様のスロットマシンと景品交換所が現役だった。なんともちぐはぐだ。

だから誰がこのシルフ襲撃を解決するのかがわからない。もう旅に出て一年経つレッドが全部やるというのなら俺は全て任せてもよかったが、あいつはもうヤマブキを越えてそうだ。かといってまだ旅をして一月のあの少女に任せるのは微妙に不安だ。それに最悪の場合もシルフに行かないなんてことだってありえるわけだ。そして詰みだ。

(ダメもとで異動を申請するか？ いや。俺がそれをやったところでヤマブキには直営のフレンドリイシヨップがあるからそっちに回されるだけだよな。本社には配属されない。タمامシにいるよりは早く駆けつけられるがそれでも遅いかもしれない。今回は速さがなによりも求められる)

俺は一つだけ考えが浮かび、そしてそれがそこまで悪くないかもしれないと思ってしまった。

六話

ハローみなさん。

今日も今日とて俺は勤労。お得意様のタママシジムへの配達に行っている。最近は出勤の度に毎回行っている。男子禁制（もちろん挑戦者等は例外）というルールもなんのその。なんかもう普通に挑戦者じゃないのに入れていた。俺は男だよなと自問自答したくなる。

近頃は顔パスで通してもらえる。もはや半ば通っている。だいたい週三日くらいで。当然だがこの頻度だ。ここの配達は俺が完全独占していた。

「はい。商品のお届け以下略です」

最初こそジムトレーナーになんだこいつみたいな目で見られていたが、最近は逆になんかもう生暖かい目で見られているし、俺が出入りするのに慣れたのか開き直って個人の配達物の届け先がジムなのも当然、ポケモンとは関係ない日用品まで頼む始末。

いやまあ俺の居たフレンドリイショップはポケモン関連のグッズと、残りの自由枠は店長の趣向のために食料品がほとんどだったので新鮮な気持ちもあるにはあるが。

「はい、では注文品お渡しするので何を頼んだか言ってください」
「今日の晩御飯のおかず」

「シャンプーが切れちゃったから新しいの」

「トイレットペーパー」

「生理用品」

「お米」

「お酒とおつまみ」

ん〜……全部自分で帰りにスーパーで買ってえ？

そんなことを言いたいラインナップだった。こういうのが割とある。いやお買い上げありがとうございます案件ではあるんだよ？

しかし腑に落ちない気持ちがある。だってもう俺じゃなくてもいいじゃん。クソ重いポケモンフーズとかじゃないならもう普通にアルバイトの女の子でもいいじゃん。でもおかげで俺の業務成績す

げーじゃん。やっぱりありがとう。だいすき。

だがこの事例がマシなことを俺は知っているので言葉には出さない。

ある日のことだ。いつも通りに配達に来ていた時。見慣れない物があった。俺は気になって聞いてみた。

「どうぞ。そういうえばこれだけなんかいつもの配達品と包装の感じが違いますね。割れ物とか精密機械とか高級品じゃないですよね？」

そういう場合は扱いを少しばかり気をつけねばならないのだが……答えは予想と違った。

「これ？ 下着。うふふビツクリした？ あっ、赤くなっちゃった。かわいー。またお願いしようかなー」

やめよう。それは本当に自分で行って買ってください。

女だらけの施設にいるだけで既にもうちよつとばかり肩身が狭いの、下着を運ばされた上にそれでからかわれる我が身を労わってお客様。

最近同僚にあいついつもタمامシジムばつか行ってるよなとか、絶対女好きだろとか、あとはここでは言えないような陰湿な陰口とかを言われて叩かれているっぼいんだぞ！

まあそいつらも潰したアジトに出入りしていたようなので事件が終わったら後でムシヨにぶち込んでやる。あと女の子は好きです。それは批判される謂れはないと思う。

それと下着は流石にジムリーダーに怒られたようで二度と頼まれることはなかった。嬉しいような残念なような不思議な気持ちがあった。

そんでまたある日のこと、配達のついでにもてなされ、お茶菓子をいただいている時に気になることがあったのでジムのおとなのおねえさんや後輩に聞いてみた。

「なんでこんなにみなさんウチで商品買ってくれるんですか？」

流石にこの頻度はおかしかったからだ。

「えー。だってータمامシデパートってなんでもあるんだもんー！ 見て見て、ポイントもこんなにー！」

「あ、すごい。ご利用ありがとうございます」

「あとこのジムへの配達だと送料がジム負担になってお得なんですよ
く先輩もどうですか?」

なるほど、と思っただが理由がわからない。提携とかしているのだからか。

「なんでえー?」

「うふふそれはエリカ様に聞いてくださーい」

と言われたから実際に聞いてみようとしたが、今日までどうにも機会がなくて話せることはなかった。

『――!』

今日も配達の為に入ったジムで、遠くからだ彼女のジムリーダーとして働く姿を見る。

それを見ていたら抱えていた疑問はどうでもよくなった。昔から賢い彼女だ。きっと何か理由があるのだろう。ちよつとこちらのメンタルを削る配達くらいなら引き受けてもいいかとも思った。お得意様なのは純然たる事実だ。

(頑張れよ)

俺はなんとなしに帽子を深く被ってその場を去った。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「エイジュちゃん。見て。トレーナーズスクールからお便りが届いてるわよ」

仕事が早めに終わり帰宅した。最近流石に色々あり、結構疲れたので今はのんびりと家にいる。最近トレーニングも怠りがちになってるので事件の解決を願うばかりだ。買い物から帰ってきた母が一通の封筒を持って来た。

「封筒? なんだろ」

「同窓会にはちよつと早いわよね? とにかく開けて見てみましょう!」

「母さんに来たわけじゃないんだけどね……なにになに」

お久しぶりです。お元気でしょうか？

この手紙は弊トレーナーズスクールタマムシ校を卒業した一部生徒様に郵送しております。

昨今はロケット団の台頭もあり情勢が不安定です。

その対策の一環として卒業生の皆様に在校生への特別授業の講師のお願いを送らせてもらっています。

日時はくくくです。

ご都合が合う方はこちらの手紙の最後にあるはいに丸を。

それ以外の方はいいえに丸を付けてそのまま投函をお願いします。

と手紙には書かれてあった。

「この日付ならエイジユちゃんも参加できるんじゃない？」

「ああ……うん。最近シフトも余裕あるからできなくはないけど」

先の一件で人員が過剰気味に補充されたタマムシデパートは現在のところかなりシフトの余裕がある。特にトキワにいる間の俺は有給休暇の消化が全くと言っていいほどできていなかったのも、こちらの上司からこの機会に休む様に言われたこともあり参加は余裕だろう。

(でもなあ……)

俺の内心としてはあんまり乗り気ではなかった。

トレーナーズスクールへ通った末になったのがフレンドリーショップの店員だ。確かにポケモンとの関わりは根強いが俺が培ったバトルの腕はあんまり生かされていない。正直あそこではポケモンバトルばかりしていた上に、公衆の面前でチャンピオンになるとか言ってはばからなかったこともあり、今のざまであそこに胸を張って足を運べるかと言うと心底微妙なのだ。

そんな風に煮え切らない俺に母さんは言った。

「行ってみたらいいんじゃない？ スクールにはお世話になったんでしよう？ 困っているのなら助けてあげなさい」

「……………」

昔。俺がスクールに通い始めた頃だろう。

その時は俺にとってこの世界は楽しいことだらけだった。まあ今も大人の世知辛さを感じつつも楽しんでるが。とにかく楽しんでた。

昔の我が家ではポケモンは飼わない方針だったのでポケモンとはあまり触れあえず、近しい知り合いもポケモンと過ごしていなかった。だからテレビのポケモン関連のチャンネルばかり見ていた。

だから俺は近所の学校の中でも多くのポケモンがいるというタマムシのトレーナーズスクールに勉強の末に狭き門をくぐって入学した。

俺自身は夢が叶ってとても楽しかった。だが周りは必ずしもそうじゃなかった。

当然だがポケモンが好きというやつ、興味がある、一緒にいたい、家にいるから詳しくなりたい、いつか自分で捕まえたい、一緒に旅をしたい、そんな似たような夢を持ったやつらが多くいた。

一方でポケモンが嫌いというやつもいた。興味ない、苦手だ、怖い、中には自分の名声のために利用するだけだなんていうふざけたやつもいた。

嫌いというやつにはポケモンの良いところを話した。興味ないというやつにはそいつの興味のあることに関係するポケモンを教えてやった。苦手というやつには苦手がなくなるように付き合った。怖いというやつには怖くなくなるように一緒に付き合っただけだ。

自分の名声とかほぎいたやつだけはどうしようもなく、ポケモンへの理解どころかまともな良識と常識すらなかったのだから退学になってた。なんであいつ入学できたんだろう。謎だ。

そういえばそいつと似た顔がゲームコーナーにいたような……まあいい。そいつもゴリキーのふりしてる時に殴って気絶させて転がしておいたのが、後でやってきたジュンサーさんに連行されていたのをテレビでやってたし。

さらにポケモンや学友と上手く接することができないやつには両方と仲良くなれるようにし、自分のバトルの腕を誇るのとはともかく、

それで調子にのって自分よりも弱い者をいじめるやつをさらに上のバトルで圧倒し、時には子供らしく喧嘩なんかもして友達になった。勉強が中々身につかないなんてやつにも居残って教えてやり、なんかよくわからないけど泣いているやつはポケモンと一緒に慰めたものだ。

それを続けた。途中からはかつては逆の立場だった友達や後輩たちも一緒にやってくれて、むしろ始めた俺が余ってしまうほどだった。

ほとんどのみんなは最後にはポケモンを好きになってくれただろうと思う。

俺が卒業しても続けると言っていたが流石にもう廃れてしまったということか。少し寂しいがこれは仕方がない。

しかし、思い返すとやっぱり俺のスクール時代全盛期だな。無双では？ドラマ一本いけるのでは？

でも悲しいかな。卒業が十歳そこらでは恋愛とかほぼないし、ハーレムとかありえないし、そもそも性欲がなかったから甘酸っぱい思い出は何も無かったよ。

というかトレーナーになって思ったんだけど、ずっとポケモンといったら個人としてのプライベートはほぼないんだよね。だから親はポケモンを飼ってないのかあと気づいた時、俺はちよつと大人の階段を上ったんだと思う。

「そうだなー。一度行くのも悪くはないかな」

まあしけた話はさておきだ。この世界に住む人たちにとってポケモンは当たり前前の存在だ。俺が前の世界で多くの動物をいて当たり前だと思っていたのと同じように。

だが俺にとつては違う。ポケモンは決して当たり前前ではない。ただそこにいるくれる奇跡に感謝をするべき存在なんだと知っている。彼らと共にある今を感謝すべき存在。あちらにいた動物がほとんどいない（インドぞうはいた）この世界では隣人として仲良くすべきはポケモンだ。人はそれだけで生きていけるほど、人間という種族だけで栄えるほどは強くない。

そんなことを言っても彼らには理解されないだろうし、なんなら直接言えば変な宗教みたいな文言だ。だから俺は少しでも彼ら彼女らにポケモンを好きになってもらえるように力を尽くしたつもりだ。かつて過ごした幼い青春の日々を思い出しながら、俺は丸をつけてポストに封筒を投函した。



約束の日。俺はきちんとした服装でトレーナーズスクールへとやってきていた。教壇に立つ以上はせめて身ぎれいにしなければと服を買ったのだ。当然タمامシデパート。宣伝になるかもしれないね？

なにより俺のここでの言動はフレンドリイショップやシルフの評判に関わるのだ。気を引き締めていく。

「あ」

「あら」

少しずれて感嘆の声が二つ上がった。

狭くなったように感じる門の先。そこに建つ懐かしい校舎の中に、相変わらず高そうな和服を着付けたタمامシジムのジムリーダーエリカがいた。そりやそうだ。俺が呼ばれるなら彼女が呼ばれるのは当然だ。

「ええと……ごきげんよう」

「……………ああ。うん」

彼女は花も恥じらうような、相変わらず可愛い顔を赤らめてそう言った。

俺はここで続けて「なんで貴女のジムはウチの店の送料無料なの？」と言うべきか、それとも「当店のまたのご利用をお待ちしています」というべきか悩んだ。無論両方営業スマイルつきだ。

その間に、懐かしい人が俺たちへと駆け寄ってきた。その人は俺たちがいいた頃の担任の先生だった。どうやらまだこの校にいたようでちよつと嬉しい。

「いやあ良かった！ エイジユ君が来てくれて助かったよ！ 最近生徒の指導に行き詰まりを感じていてね！ 君のあれを参考にしたら良かったが大分傷んでしまつて読めない所もあつてほとほと困つてたんだ。どうか新しいカリキュラムと一緒に考えてほしい！ このとーり！」

「え」

今度は間違いなく俺たちの声が重なつた。そうだろう、俺たちは特別講習のために呼ばれたのだと思つて疑わなかつたのだから。

「あの……特別授業の講師は？ その為の私たちですよ？ 生徒さんのために呼ばれたのですよね？」

エリカが俺の心の声を代弁してくれた。いいぞお！あとでちゃんともまたのご利用ありがとうございましたつてばつぐんの営業スマイルで言うからな！

「ああそうだとも。だがそれはエリカ君にお願いするよ。君はこの街のジムリーダーだし今の世代の子たちにも評判だからね」

「じゃあ俺は……？」

おそるおそる聞いてみた。

「エイジユくんは僕たち教師やそれこそ君たちの世代の生徒だったら講義の席をとるために暴動すら起きるだろうけどね。今の若い子達には知名度が薄い、ただの卒業して就職したフレンドリイシヨップのお兄さんだから……その……諦めて先生と一緒にカリキュラムを作つてよ。そっちの方が彼らの為になるんだ！」

先生は神妙な顔で言つたが、後進を導かんとやつてきた俺にはあんまりにもあんまりな言葉だつた。いや教科書作りもそりや大事だけど……やっぱ人の顔見てやつた方がやる気が違うし。えええ。

「あの……その……私はむしろエイジユさんのお話を聞きたいのです
が」

後半か細いな！

なにかフォローをしようとしているようだが、もうフォローのしようがないのかなんと言つているのかわからない。

（いいんだよ無理しなくても！ そっちだつて大事なことだとは分

かってるから！)

俺はなんとか声を出す。

「いいですよ……やりますよ。教科書作り！ やればいいんでしょう！」

俺は若干やけくそ気味に了承した。一体全体あの回想はなんだったのか。

というか俺の昔作った物を使ってるのならコピーとかスキャンとかしておいてほしい。もしくは最初からそれ目的で呼んでほしい。ちゃんと来たから。

(ただこうなったら教師が馬鹿みたいに苦勞する代わりに生徒とポケモンたちに成果が出るスパルタな高効率カリキュラムを作成してやる！ 覚えているがいい！ 大変だぞ！)

その日。俺は夕焼け空が目痛い帰り道で、人知れず空を見上げて一滴。何かがこぼれた。

ちなみに休憩時間に覗いた講義室は、見事満席となっており、エリカが教鞭を執り、熱心に授業をしていた姿が見られた。ちよつと羨ましく、そして誇らしかった。



(ああ……このなんとも言えない感情をどうしてくれよう)

その夜の出来事。わが母校の恩師によるあんまりにもあんまりな仕打ちにムカムカしていた。わざわざ有給を三日も取ったのに。もう激おこブンブン丸だ。これも全てロケット団のせいだ。絶対許さんならなロケット団。

(この怒りはロケット団で晴らさねばならぬ)

エイジユは激怒した。必ず、かの邪知暴虐のロケット団をカントーの地から除かねばならぬと決意した。

自身の戦力である四匹のポケモンをボールへと収め、かつての旅路を共にした荷物を持って家から飛び出る。そして、その勢いのままにタマムシを飛び出し、ヤマブキを通り越し、シオンタウンへと辿り着

いた。

(フジ老人確認できずか……まさかベストタイミングだったとは。有給の間でタイミングが合うのなら参戦するつもりだったがちょうどいいか)

そろそろポケモンタワーの出来事が発生する頃合いだと思い、俺は行きがけにフジ老人が住んでいる家の窓をちよつとだけ覗き、姿のないのを確認したらすぐにポケモンタワーへと突入した。

ここは幹部級が出張ってくるようなイベントじゃないので優先度が少し低かった。一応休みの時にちよくちよく来ていたのだがまったく時間のある今日で良かった。

ただ懸念事項が一つ。シルフスコープをあの子が持ちだせたのか怪しいのだ。どうにも上で暴れすぎて彼女は奥まではたどり着けなかったらしく、潜入させたストライクとベトベトンにシルフスコープの写真を見せたが、どうもそれを見ていないようだった。

(ピツピにんぎよう効けばいいけど)

野生のポケモンやトレーナーを振り切りつつ片手にピツピにんぎようを持って階段を上がる。シルフスコープがないのでこれは賭けだ。

上の階層になるとガラガラに呪われたと思われるきとうしが数人絡んできたが、彼女らに当たる訳には行かないので穏便に正気に戻ってもらった。

その後も似たようなやりとりをしてから最上階の階段に着いた。しかし何も感じない。どうやらガラガラの魂は天へと召されたりしない。

(助けてやれたらよかったが……)

ガラガラがいつどこで殺されたのかが明確にわからないので手が打てなかった。もしも……を詮索しても意味のない事だが。

俺は少しだけ立ち止まり、そしてまた歩みを進めた。

「着いた……む。誰か既に戦っているのか」

辿り着いた最上階では大勢のロケット団に誰かが囲まれていた。数は一人。見たところでんき技が使われているようだ。あつ、今ピカ

チュウの姿が見えた。さらに凶鑑を片手に持っているのも確認できた。

どうするべきかの判断をするために階段で一度身を潜める。適当に飛び出して邪魔になるのも悪いし、負けそうならば飛び出だせばいい。

(ピカチュウ……ということは博士の言っていた少年かな？ 確かライバルの名前はなんだったっけ。まあそれならアユミあの子と同じくらいの実力だろうから一応助太刀の準備を……!? なんてあの子がここに!?)

状況を見ていた俺の目に映ったのは孤軍奮闘する少女の姿だった。ピカチュウを連れられた少女。金のポニーテールの少女。彼女を俺は知っている。優しい子だ。率先してバトルなんてする性質じゃない。『そうじゃ。この前ピカチュウを連れられた少年とイーブイを連れられた少女が店に来なかったかな?』

彼女の物であろう、床にぽつんと落ちている麦わら帽子を見て、前に聞いたオーキド博士の言葉を思い出した。

(そういうことか!)

俺は咄嗟に飛び出しながら使わなかったピツピにんぎょうを放り投げ、彼女に声を掛けた。

「イエローちゃん! ここは俺に任せろ!」

「え! 店員のお兄さん!! どうしてここに!?!」

俺は手持ちを全員出してから、すぐに消耗しているイエローのピカチュウにかいふくのくすりを吹きかける。尻尾が尖っていないので♀のようだ。

「いいから! 俺なら一人でも大丈夫だ!」

「……わかりました! 私があつちのおじいさんを!」

イエローちゃんを奥へと先行させた俺は相手の頭数を確認する。

「なんだあお前は? 俺たちロケット団の邪魔をするなんてどうなるかわかってるんだろうなあ……!」

「相手の人数は五。一対一でちょうどいいな。行けみんな!」

俺の言葉に即座に反応してストライク、ニドキング、カイリユ、ベ

トベトンはそれぞれが相手に攻めかかった。

「おいおい！ お前は数も数えられないのか？ お前のポケモンは四匹！ 数が一つ足りないじゃねえか!? 行けドガス！」

「があゝ！」

「数が足りない？」

ロケット団に育てられたせい、容赦なく躊躇なく人間である俺へと向かってくるドガスは命じられるままにたいあたりを仕掛けてくる。見たところレベルは25前後。大したことはなさそう。俺はそのまま軽くしゃがんでから膝をばねにして勢いよく拳を突き上げて跳んだ。

「俺自身に残り一つの戦力ということだ！ スカイアツパー!!」

生き物というのは戦えば基本的にはデカくて重い奴が勝つと相場が決まってるんだ。この世界だと例外ばかりだけど。ポケモンってほんと不思議。ただまあ今回に限ってはドガスは60cmの重さは1キロ。近接戦を選んだ時点で勝負は決まっている。なんたって相手は手も足も出ない。というか無いし。

「があ!？」

「は?」

浮遊している相手のドガスに拳が直撃。すると声を上げてすぐにポケモンタワーの天井に衝突し、力なく落下したのをキャッチしてタワーの床に優しく寝かせる。しかし手加減してかくとうタイプの技を使ったというのに。やはりロケット団なんぞにはポケモンは育てられないらしい。ポケモンにごめんなさいをしる。

「さあ。出すなら次のポケモンを出せ」

「え? は?」

「じゃあ次はお前だ。トレーナーバトルだ」

俺は現状が理解できていない相手に拳を向けた。

「ひい！ す、スリープ！ かなしばりい！」

「遅いー！」

スリープから離れてすぐに相手の射線から外れる。そして加速してスリープへと跳んだ。

「とびひざげり!!」

「俺の手駒があ!?!」

俺の膝が見事に直撃したスリープもまた力尽きた。すまないとは思っている。それとさいみんじゅつ教えてください!

俺は最後に残った男に対してゆっくりと歩み寄る。手持ちは見たところまだ戦っているようだ。みんなできるだけ周りに被害が出ない様に気を使ってくれていた。いい子だ。

「待て! 待て待て待て! 俺の手持ちはもういない! 降参する!」

ロケット団の男は尻をついて後ずさる。思えばロケット団の奴とこうしてロケット団の姿として話す機会がなかったことを思い出す。ポケモンたちの決着を待っている間に少し話をしようかと語りかける。

「残念だが俺はポケモンじゃないからな。戦うのがトレーナーのお前相手でも一向に構わん! だが少し聞きたいこともある。それまでは待ってやろう」

「やめろ! 近づくんじゃねえ! そもそも俺がてめえに何したって言うんだよ!」

「別に俺に限らずにさんざん好き勝手やっただろうに」

遂にそいつは壁にあるポケモンの墓石に辿り着き、逃げる場所を失った。そうなると思いき直ったのかそいつは叫ぶように吐き捨てる。

「ああそうだよ! 好き勝手やって何が悪いってんだ! どうせポケモンなんざ俺らに使われるだけのもんだ! どうなるうが知ったこつちやねえ! そうだ! ロケット団に入りや思うままに生きられる!」

「お前らには悪の美学はないのかよ。首領の掲げる理想に共感したとかはなかったのか」

「ああ? 組織のつまんねえ古参みたいなこと言ってんなあ。んなもんいらねえよ! 楽しんで手に入る力さえありや構わねえ! 俺がよければ構わねえ! 団員だろうがそうでなからうがな! そこで戦ってるあいつらだってそう思ってるだろうさ!」

俺は心底からの溜息を吐いた。この世のロケット団はここまでどうしようもない奴らなのかと。お前ら人間じゃねえつてのは割と妥当な言葉かもしれない。

(少なくともあの頃の俺が戦ったサカキさんにはあつたはずだ。美学も。矜持も。信念も。組織の強み、人が協力して生まれる力を信じられる男のはずだった。一度だけのバトルだけ……それをポケモンたちからも感じる事ができた)

それがどうだ。こんな輩が集まったところでできるのは烏合の衆。それでは組織の質を落とすだけだ。それがわからない男じゃないはずだ。一体ロケット団はどうなっている？

男はその間も好き勝手喚いている。いい加減うるさい。俺はポケモンたちの決着が近い事を確認してそいつへと歩み寄った。

「そうだな。さつきお前が言った質問に答えよう。お前らのやったこと。まず一つ。ガラガラを殺した。次に二つ目を言うならお前らのせいでこの安らかであるべき場所で本来はあつてはならない醜い争いを俺のポケモンとお前のポケモンにさせてしまったこと。三つ。知り合いの少女をよつてたかつていじめるといふ胸糞悪い光景を見せられたこと。そして最後は、ある意味でなによりも最初……」

「そんなこと知るか！ 俺はこんなところで捕まつていい男じゃねえ！ ウラア!!」

そいつはわるあがきか、それとも幻の勝機でも見えたのか俺に殴りかかってきた。

ポケモンに人を攻撃する命令をしちやいけないよ。フレンドリイシヨップのお兄さんとの約束だ。例外はあれど基本的に犯罪だからね。トレーナー同士ならたまたま流れ弾当たるとか日常茶飯事でわりとセーフも多いけどね。

だけど……ポケモンバトルが許されているこの世界。必然的に規模が小さくなる人間同士の喧嘩というならよほどの重傷を負わせたしをもらえるのだ。それがこの状況で、相手が明確な悪人であると言うのなら……それはもう察して頂きたい。

とういか我慢の限界だ。大人しくしていればこのまま縛って引き渡すだけで済ませてやったのに。

「聞けや！　それは貴様らが栄光あるシルフカンパニーに喧嘩を売った事じゃあああ!!!」

「ぎゃーーー!!!」

　　俺の拳はロケット団の顔に直撃した。

　　その後、この光景を見たポケモンタワーにいる他のロケット団は全員が大人しく捕縛されたのだった。めでたし。

七話

「やなかんじー！（にやー）」

倒したロケット団が窓から逃げて行った。ここ結構高いのに大丈夫なのかなと心配になったりもする。

「ん？ 今、なにかあの二人と一匹の声に混じって、誰かの悲鳴が聞こえなかったかね？」

私になんとか二人組のロケット団をポケモンバトルで倒すと、フジ老人がそう言った。

「そうですか？ あー！ おじいさん。むこうにボクの知り合いが戦っているはずなのでここで少し待っててもらえますか？ かなりの数のロケット団がいたからもしかしたら苦戦しているかも」

「わかった。ワシはこのカラカラとここで待っているから気にせず行っておいで」

「はい！ カラカラ。おじいさんをお願いね」

「きやうー！」

カラカラもバトルで傷ついているのに、それでも私の言葉に力強く頷いてくれた。お別れできたといってもまだおかあさんが亡くなっただばかりなのに……強い子だ。私も頑張らなくちゃという気持ちになる。

私はイエロー。前に私が住んでいるトキワの森で出会ったレッドさんというポケモントレーナーに憧れて、十歳の誕生日にトレーナーの資格を取り、マサラタウンのオーキド博士にポケモン図鑑をもらって旅だった新米トレーナー。

パートナーは故郷のトキワの森で出会ったピカチュウ。私はこの子と一緒に憧れのレッドさんが歩んだ旅路を歩んでいる。

故郷から旅に出ていた途中で辿り着いたこのシオンタウンで、私は行方が分からないというフジ老人を探しにポケモンタワーに入った。

フジ老人が見つからないままタワーを登り、後は最上階だけになったので最後の階段に行くとそこにはゆうれいがいた。その正体はロケット団に殺されたと言うガラガラの霊だとわかった。さらにその

場にはそのガラガラの子供のカラカラがいた。

突然だけど、私はポケモンの心が人よりもわかる。肉体を失って幽霊になったからなのか、ガラガラの霊の気持ちは特に鮮明に、その哀しみと怒りがわかってしまった。

私はカラカラと一緒になんとかガラガラの霊を鎮めて最上階に着いたのだけど、そこにいたロケット団に囲まれてしまい、追い詰められていたのがさつきまでの出来事。

でもそんな時、故郷のトキワの森の近くにあるトキワシティのフレンドリーショップで店員をしているお兄さんが助けに来てくれた。

あのお兄さんは私みたいにちよつと街から遠く、加えて野生のポケモンが多い不便なところに住んでいる人にもしつかりと商品の配達をしてくれるとても頼りになる人だ。あの人のおかげで私も含めて助かっている人は多い。あとは働く姿が結構かつこいいからと一緒に働きたくてあのショップにアルバイトを申し込む女の人が多いとも聞いた。

連れているポケモンとともつても仲良しで街の人にも慕われている、尊敬できる人だ。だからあそこを任せてしまったけど。

(ポケモンたちもしっかり育ってたけど、相手はあの数だったし……大丈夫かな?)

そんな心配をしていた、しかし私が彼の元に辿り着いた時には既に店員のお兄さんは勝利していた。

「店員さん！」

「おおいエローちゃん。事情はこいつらから聴きだした。あつちにも二人いたらしいけど無事だったか。良かった」

私の方を見て笑顔で話しながらも、その手で倒したロケット団の連中を念入りに縛り上げている。一人だけ何故かやたらとボロボロな人がいるけど。どうしたのだろうと私は気になったけど、今は店員さんだ。

「はい！カラカラが手を貸してくれたのでピカチュウと一緒になんとか。そちらは大丈夫でしたか？」

「ふふ。見ての通りだ。これでもまだまだ鍛えているからな。その辺

の輩には負けないさ」

「ほえー」

前に釣り人をやっているおじさんに連れられてフレンドリイシヨップに行った時、そこにいた店長さんに聞いた話はどうやら本当だったらしい。なんでも彼は昔はジムバッジもいっぱい取った凄腕で、今でもカントー四天王と互角以上に戦える実力者だって話。正直四天王は話を盛り過ぎだと思う。

「さて、みんなダメージはないな？ よし。よくやった。じゃあボールに戻ってくれ。ではフジ老人のところに行こうか。ああイエローちゃんの手持ちはダメージを受けてないかい？ 治療するよ」

店員さんは自分の手持ちを労った上で私のポケモンも気にして、私のポケモンもしっかりと治してくれた。やっぱりこの人は優しい。もしかしてポケモンに命令してあのロケット団に酷い事をしたんじゃないと思っただけどきつと勘違いだろう。

「お久しぶりですねフジさん」

「ん……ああ君か。懐かしいな。すっかり大人になって。カツラと一緒に君に出会った日から確かもう七年になるのか。君に助けられたのはこれで二度目だ」

「あの時は中々大変でしたね。死ぬかと思いましたよ」

フジ老人と店員さんは顔を合わせたただけでお互いに懐かしそうな雰囲気です。

「お二人は知り合いなんですか？」

「まあ昔は俺も旅をしていたからね。シオンにも寄ったよ。この街で会ったわけじゃないんだけど……まあそれはいいかな。フジさん。家の人が心配していましたよ。帰りましょう。俺たちで送りますから」

「そうか……心配をかけてしまったか。いや。だがまだ帰れない。荒れてしまったここを少しでも綺麗にしなければならん。私はそれが終わってから帰る」

フジ老人はそう言ってお墓の手入れを始めてしまった。そして私は気づいてしまった。

「あの……店員さんは先に戻ってお家の方に無事だったって伝えてもらえませんか？　ここのお墓を荒らしたのは多分私なのでお手伝いしてから追いかけます……」

床の焼け焦げたような後はきつとでんき技。他にもロケット団のポケモンとの戦いで傷ついたであろう傷がちらほら見えた。

さらに店員さんのポケモンが戦った後と私が戦っていた時、この場所の状況が覚えている限りでほとんど同じだ。あの人は不利な状況でもこの場所を荒らさない様に戦ったのだ。それはどれほどの技量がトレーナーとポケモンにあるかを明確に告げていた。

「私が未熟だったから……こんなボロボロに……」

「……それは否定しない。きつと君がもつと強ければこの場所の被害は少なかつただろう。でも、例えば戦い方が拙くても、誰かを救う為に戦ったというのは誇るべきものだ。その行為の価値が損なわれることはない。そう落ち込まないでいいんだ。争い事が苦手なのは知ってる。がんばったね」

「はい……でも……」

私が言葉が続けようとしたら店員さんは私の頭に何かを乗せるように手を置いた。

「あ……麦わら帽子」

それは私の麦わら帽子だった。いつの間にか落としていたらしい。「そつちに落ちてたぞ。大方どこぞのませたお嬢さんに『女とばれたら舐められる』とか言われて被ってたんだろ？　オーキド博士なんかは引つ掛かってたぞ。効果はあるからちゃん和被っておきな」

「いえ。それは私のおじさんから『お前も旅に出るのか！　ならこれ持ってけ！　なんでも旅する子供に良い帽子を被せて送り出すのが流行ってるらしいからな！』って言われて無理やり」

確かに身を守るために知らない人の前では自分のことを私ではなくてボクと言っているけど、旅で出会った人はみんな良い人なのでこの言いつけを守る必要があるか最近は怪しくなってる。ロケット団は相手が誰だろうと襲ってくるみたいだし。

そういえば帽子と言えばレッドさんも、それと私が一緒にポケモン

凶鑑を貰った時に一緒だった女の子も帽子を被っていた。よかった。田舎者だけど私は流行に乗れているみたいだ。

「それまだ流行ってたのか……ごほん。とにかくいいかイエローちゃん。建物まるごとぶっ壊したとかならともかく、ちよつと傷つけたくらいなら大丈夫だ。後できつちりと掃除すれば許してもらえる。なにより……ここで眠るポケモンたちだって自分の墓が傷ついてでもフジ老人とカラカラが助かることをきつと望んだだろう。ここでは嫌な感じもしないだろ？ フジ老人も俺たちに手伝えと言わなかったのはそれを理解しているからだ」

店員さんは帽子についての話を聞くと苦虫を噛み潰したような顔をしたけど、すぐに真面目な顔で私にそう言った。

確かにここにはガラガラの霊と向かい合っていたような嫌な空気はない。とても安らかな空気に包まれている気がした。それはここで眠る彼らに許されているように感じた。

店員さんは私の背中を押しながら言った。

「さあ！ 弱いのが嫌なら俺が面倒見てやろう！ 荒らしたのを気にするなら一緒に謝るし、掃除もしてやる！ だから……また誰かが困っていたら力になってあげなさい」

「……はい！」

私たちはフジ老人を手伝うために彼のところへと駆け寄った。



「エイジュさんのお母さんが作ってくれたご飯美味しかったです！
ごちそう様ですー！」

「まあありがとう！ エイジュちゃん！ イエローちゃんいい子ねー！
ずつとウチにいてもいいのよー！」

エイジュさんのお母さんとはとっても優しい人でした。私にもよくしてくれます。

「ずつとはないけどひと月くらいはいるかも。父さんもいいよね？」

「……………(っくっ)」

「ありがとうございます！ お世話になります！」

お父さんは身体が大きくてあんまり喋らない……というよりこちらの言葉を喋れない人らしいですけど、優しそうに笑う人でやっぱりいい人そうです。髪の色や体格は親子だからかエイジユさんに似ていました。

「嬉しいわー。今度一緒にお買い物とか行きましょうね！ ああ！

やっぱり女の子も欲しかった。ねえパパ？」

「……………」

お二人はお母さんはカントーの人でお父さんがイツシユ地方の人みたいけどそんなことは関係なしにとっても仲良しでした。それとお父さんの方は昔どこかで軍人さんだったらしいです。今でもカントーにいる昔の仲間と仲良しだと教えてもらいました。

「俺らはあつちでポケモンというから。お好きにどうぞ。行こうかいエローちゃん」

「あっはい」

「さて、どうやって鍛えようか？」

「なにか考えがあったんじゃないんですかエイジユさん？」

私たちはあれからロケット団を街の人に任せてからシオンタウンを出て、店員さん改めエイジユさんのお家のあるというタمامシシティへと来ていた。実は今まで名前を知らなかったというのはなんとかバレなかったみたい。よかった。流星に失礼だもんね。もう何年もシヨップにはお世話になってるのに名前を知らないなんて。

エイジユさんの実家にお邪魔させてもらった私とポケモンたちは余っていたお部屋に泊まらせてもらい、今はそこで今後の話をしていった。

「そりゃあいくつもあるが、実は今は——」

エイジユさんは私にポケモンのけづくろいのやり方を教える手を止めて、私に話してくれた。

彼は今現在、私の故郷でもあり彼の職場であるトキワから離れて、このタمامシでシルフカンパニーの一員としてロケット団と戦って

いることを。

「そうだったんですか……それなら私も！」

力になりたい。そう思った。

「助けてあげろと言ったし、その気持ちも嬉しいが今の君では戦力として頼りない。概算で戦力比がかなりあちらに傾いているからね。せめてあの場のロケット団くらいは一人で制圧できないと戦いに連れてはいけない」

「そう……ですよね。すみません」

私はそもそもバトルが好きじゃない。あくまで私の旅の目的は憧れの人の足跡を追いながら、オーキド博士に貰ったポケモン図鑑のデータを集め、のんびりと自分の住むカントーを見て回り、見聞を深めること。レッドさんたちのようにバッジを集めたり、その先のポケモンリーグを目指してたりもしていない。バトルを目的としていないのだ。

それでもポケモンを悪用している悪い人を許せない気持ちがある。その為なら戦うことだつて辞さない気持ちだ。

そんな逸る私の心を見透かしたのか、エイジユさんは私を諭した。「俺も社長に言われたことだが……この戦いは当然だが自分よりもポケモンが傷つく可能性の方が高い。イエローちゃんもその気持ちは大事なもののだけど、戦った時に自分のポケモンたちがどうなるか、そういうことをよく考えるんだ」

私は大事なことを忘れていた。戦うのを決めるのはトレーナーである私でも、実際に戦って傷つくのはポケモンたちだ。

「！　そうですね。大事なことを忘れていました。ごめんなさい……どうしようか、みんな」

私は自分のポケモンの入っているモンスターボールに触れた。みんなの気持ち伝わってきた。

トキワの森で出会ったピカチュウとコラッタはずっと一緒にいたからか私と同じ気持ちだ。そしてポケモンタワーからついてきたカラカラは母親がロケット団に殺されたから誰よりも戦いたがっているのが伝わってきた。

私とみんなの気持ちは一緒だった。それは嬉しい。でもさつき言われた言葉が胸に残っている。みんなには傷ついてほしくはない。すぐに治療してもらえたけど、きつとポケモンタワーでのバトルだつてみんなは痛かったはずなんだ。

そう思うと私はどうすればいいのかわからなくなった。

それを察してくれたのかエイジユさんは私にアドバイスをくれた。「それならやはり強くなるろう。実際にその時に間に合うかは別として、こんな状況を知っているのに何もしないよりはきつといいはずだ。旅の助けにもなるだろう」

「私にバトルを教えてくださいませんか!？」

エイジユさんのバトルの腕は直接見たことはないけれど、相当なものだと思う。そんな人に教えてもらえるなら私たちはきつと強くなる。エイジユさんのようにできるだけ多くが傷つかないような、そんな戦いもできるようになるかもしれない。

しかし私の思いに反して、彼の答えはノーだった。

「いや、さつきも言ったけど俺は仕事があるからそんなには付き合えない。休みも増えたけどそれでもやっぱりいい方が多いからね」

「じゃ、じゃあどうやって強くなればいいんですか?」

せめて少しでも強くなりたい。

「大丈夫。俺以外の強いトレーナーに教えを乞うという方法はある。例えばピカチュウ好きなタフガイとか知ってるし。だけどイエローちゃん。君は戦闘の基礎そのものが出来ていないと俺は考えている。だから君が行くべき場所はここだ」

「(っ)は……?」

指し示したものを。それは……

八話

『カラカラー！ ホネこんぼう！』

スクールのバトルフィールドではイエローちゃんが同い年くらいの少女とポケモンバトルをしていた。いや、あの子は少々幼く見えるのでもしかしたら年下なのかもしれない。

俺はそれを先生と遠くから一緒に見ていた。

そうだ。俺は母校のタمامシトレーナーズスクールへとイエローを短期入学させた。俺は通学の年月こそ違うが一般的な学校のような就学形態で通ったが、既にトレーナーになった者にも別の形で門戸を開いているのだ。

まあ本来ならそれでも色々と入学には手間がかかるのだが、手続きなどの面倒は先生が全て引き受けてくれた。前回のあれとこれで帳尻を合わせようというわけだ。うーんギブ&テイクってやつぱり素敵だ。

「ねえエイジユ君？ 君が新しく作った内容に沿って授業をやりはじめて三日で、教師たちがもれなく筋肉痛になったんだけど？ あれは本当に必要なのかい？」

「ええ。意外とトレーナー自身が鍛えるのって強くなるにはいいんですよ。ポケモンってこつちのこともよく見てて、トレーナーが弱いと自分の技に巻き込まれない様に手加減しちゃうんです」

これはマジな話だ。例をあげるとカイリユウのたつまきとかぼうふうとかのような技は近くにいたら常人では立つてられないレベルの影響がある。

「初耳だけど……なるほど。理屈はわかる。いやしかし、このままだと我が校の教師たちが筋肉講師陣になってしまうのだが……」

「その何が問題で？」

まるでわからない。こんな世界こそ俺は自分自身を鍛える事を推奨する。イシツブテ合戦くらいはできないとダメだよ。嗜みだよ？ マサラでは子供だって笑顔でやってるよ？

「そんなに筋肉に傾倒していたかい！？ むしろ君は身体細いくらい

だったよね!? その服の下どうなってるの!?!」

「そりやもうアレですよ。旅の後で目的があつて鍛えたんですよ。おかげで今は風邪すら引きませんし、毎朝早く起きれるし、ポケモンバトルは強くなるし、IDくじも当たるし、自販機でもう一本出るし、きつと女の子にもモテる」

「運は知らないけどキミはスクールの頃から無遅刻無欠席の健康優良児だったよ!?!」

そんな恩師と生徒の掛け合いをした後、俺がここに来た本題へと入った。

「こほん。エイジユ君。君が連れてきた少女イエロー君はがんばっている。バトルの腕やポケモンの知識なんかはまだまだだけど、ポケモンとのコミュニケーション能力は類を見ないよ。一体、彼女をどこで見つけて来たんだい?」

「内緒……というほどでもありません。渡した書類通りに彼女はトキワの森出身者ですので。幼い日からポケモンと過ごしてきたのでしよう。あとは強いて言うなら優しさですね。才能とも言えるかもしれないませんが」

「ふむふむ」

俺の言葉に先生は頷く。

「しかし、君らのような生徒は現れないね。あの年はすごかった。名家の才女と既に噂だったエリカ君が入学して来るのだけでも教師陣は戦々恐々としていたのに、それを上回った君までいたんだから。二人に影響されてか他の生徒たちも最終的には他の代なら首席クラスでもおかしくない逸材がごろごろいた」

確かに在野のトレーナーと旅の中で戦うことも多かったが、ポケモンは鍛えててもトレーナーの方の力量は同級生の方が強いかな? つて思う時があつた。流星は難関と言ったところか。ああすばらしきわが母校。

「そういえばタمامシジムに配達に行った時に、スクールの後輩がいましたよ。今ではジムトレーナーだそうです。彼女も優秀でしたよね。覚えてますか?」

「ああ。タママシならアコ君だったかな？ 彼女のように君たちを先輩として仰いだ子も、また優秀な世代だった。やはり身近な目標となる人物は良い影響を与えてくれるものらしい」

先生はよきかなよきかなと頷いた。

実際にジムトレーナーは数あるポケモントレーナーの仕事の中でも現実的なレベルで最高に近いものとなっている。ジムリーダーや四天王にチャンピオンはほんの一握りにのみ許された立場なのだ。

「それぞれが頑張っただけですよ。それに先生方の熱意もありました。環境が良かったんです」

「そう言ってくれると……私たちも誇らしいね。私は教師としては今でもあんまり自信がないね」

「板書汚かったですし、教科書は間違えるし、でもバトルはかなり得意でしたよね？ そういう意味では結構人気あったと思いますよ？

それにしても俺が知ってる教師も減りましたね。もう先生しかいないとは」

このスクールはそれなりに大きいので昔からもつと多くの先生がいたが、まさかこんなに知った顔が少なくなっているとは思わなかった。

「ああ……それは君たちに原因があると言ってもいいかもしれない。悪い意味じゃあないんだけどね」

「俺たちに？」

「そうだね。このトレーナーズスクールは基本的に私の様にポケモン協会から派遣された者と各スクールで雇った者が教師として教鞭を振るっているというのは知ってるね？」

「はい。でも先生が協会の人だと言うのは知りませんでした」

本当に知らなかった。というか協会から派遣される人こそ十年近く赴任していたら転勤などいなくなっているのではと思うのだが。

「言わなかったからね。君を驚かせられたのだから言わなかった甲斐があるという物だよ。さて、本来なら私はもう協会に戻っているか、もしくは他校へと移っているはずだと察していると思うが、このスクールではある問題があつてね。古株になった私が移る訳には行か

なくなつたんだよ」

「問題ですか？ ……そんなことは聞いたことがないですけど」

逆にここは優良校として全国的に名が通っている方だ。入試ではカントーのみならず、お隣のジョウト、他の地方からだって受験生が集まってくるほど。おかげで入試には相応の苦勞をした。

「スクールで雇われた人は名門を謳うだけあつて優秀だ。ただ教師らがある程度勤めたら出ていったのさ。みんな君らを見て、教師になつた頃の熱意が湧き出たのか、自分の故郷や思い出の場所でがんばると出ていくんだよね。当時、君たちが在籍していた時の先生はみんな余所に転勤していったよ。最後の方まで残っていてくれたジョバンニ先生も資金が集まったからとジョウトに私塾を開きに行っちゃったしね」

「それは…：…なんとも」

なんとも言えない。ごめんなさいと言うには先生は嬉しそうだったからだ。

「あの日は悪かった。まあ生徒にアンケートを取つた結果からエリカ君がやるというのはほぼ決まっていたのは事実だがね…：…ただ君がもしも本心から教師になりたいと思つているのなら、明日からでもこの校で働かないかい？ あの頃の環境の中心であつた君なら今からでも立派な教師になれると思うよ」

「いいえ先生。この前のことを気にしているのならもうチャラです。それにたまーのOB講師くらいならともかく、そこまでできる自信はないです。今のショップ店員の立場も自分で驚くほど似合つています」

天職はこれだ。これは譲らない。

「いいや。なにも根拠なく誘つているわけじゃない。イエロー君に君なりのトレーナーとしてあり方を教えただろう？ 彼女はかつての君たち世代の生徒と同じような光を目に宿している」

(いやあの子は元からお目目きらつきらだったよ)

俺は心の中で呟いた。

そのまま問答が続くかと思つたが、先に手を引いたのは先生だつ

た。

「……すまないね。今の君にこれを頼むのをどうかと思う私もいる。エイジユ君。君がシルフカンパニーの一員としてロケット団に対抗するメンバーの一人として動いているのは知っているんだ」

「知ってたんですか？」

これにはちよつと驚いた。

「当然だろう。社長さんへ君のスクール時代の資料を用意したのは私だ。今も随分と頑張っているとも聞いている。あの連絡も実のところ君ら卒業生からちゃんと返事が来るかという確認のものでもあった。本来ならエリカ君以外は必要ないのにも関わらずに君を呼び出したのはただ顔が見たかったからだ」

「そうでしたか。生存確認と……ありがたいお話ですが、ならばこそはつきりとお断りさせてもらいます。俺はこのまま事件が解決するまで戦うつもりです」

俺の心はもう決まっている。それ以上の言葉はない。

「そうか……そうだろうね。君はなんだかんだで正義感も強い子だった。それに私自身も君が立つのならそれが良いのではという思いもある。……教え子に危険な目にあってほしくはないから誘ったのだけどね。一つ聞くが親御さんにはちゃんと伝えたのかい？」

「それは……いいえ。すいません、伝えてないです。あまりにも何も聞かれないのでもう気づかれているのかもしれないけど」

怒られている訳でもないのに、なんとなく謝ってしまった。どうにも生徒だった頃の感覚はぬぐえないようだ。

「はは、相変わらずだなあ。だが敵は大きい。卑劣にも家族を狙って来ないとも限らない。用心しておくことだ。ご両親は私の方でも気にしておくよ。だから行きなさい。君ならうまく解決してくれるんじゃないかなんて予感もある。それに、きつともう君の心は決まっているのだからからね」

「ええ。きつちりと解決します。大船に乗ったつもりで待っていてください」

俺は船乗れないけどね！

「いいかい？ これだけは忘れてはいけないよ。シルフカンパニーがロケット団の手に落ちたら、確かに僕たちトレーナーとポケモンの暮らしは大いに被害を被るだろう。でもだからと言ってそれを防ぐために君が犠牲になって良い訳じゃないんだよ」

先生はそう仰った。ありがたい言葉だ。

(でも俺はこの在り方を守りたいんですよ)

「肝に銘じておきます」

「元気に帰ってきなさい。君とまた会えるのを楽しみにしているよ。そういえば君はそろそろ誕生日になるのかな」

「はい……もうそろそろ十九歳になります」

「君が最初のバツジを取ってから八年か……早いものだ」

本当に早い物だ。しかしまあ十九歳の誕生日が近いと言うのは本当に神様の作為を感じるなあ。神様がアルセウスならきつと個性はイタズラ好きだ。

「ああ！ もうこんな時間だ！ 随分と長話してしまったね。年を取るとこれだからいけない。朝礼でも気を付けているんだけどね」

「あつ！ おーいエイジユキさん！ 校長先生もこんにちは！」

こちらに気付いたイエローがこちらに駆け寄ってきた。後ろからは彼女の学友も着いてきていたのでそこらには会釈する。

「やあいエローちゃん。頑張っているかい？」

「はい！ えへへ、お友達もできました！ お友達のポケモンとのバトルもとっても楽しいです！」

そう言ったイエローの顔は眩しい笑顔だ。そのまま彼女は無我夢中とばかりに話す。

「ポケモンバトルってすごいですね！ 今まではポケモンが傷つくことばかり考えていましたけど一緒に頑張ってバトルをしていると今までは見えなかった良いところも見えてくるというか……ちよつとだけジム戦やってみようかなーなんて思っちゃいました」

「えへへ。イエローちゃん。コラツタがラツタに進化した時にビックリして泣いちやっただって言わなくていいのー？」

「もー！ それは言わないでよー！」

顔を真っ赤にしてイエローは年相応に可愛らしく怒る。

イエローは上手くやれているようだ。この際実力などは考えずにこの学校を存分に楽しんでほしい。先生改め校長もそれを満足そうに眺めている。

(ああ……俺にもこうしてただただその日を楽しんで、それでよい明日が待っていることを信じて疑わない日もあった。でもそんな日が来ないかもしれないのが今なんだ……)

そんなじゃれあう二人に、俺は尋ねた。

「なあ二人とも。ポケモンと一緒にいるのは楽しいかい？」

「はい！」

「そうか……そうだよな。これからも楽しんでくれよ。ずっとな」

「? はい」

「エイジユさん……」

「……………やはり行くのかい?」

友人の少女は頭に疑問符を浮かべ、事情を知る二人は心配そうに俺を見た。

大丈夫だ。前に大口を叩いてダメだった俺が言うのもなんだが、めげずにまたデカイ口を開こう。俺は負けることは心配していない。こちらの敗北条件は俺が参加しないことだけだと断言しよう。だから参加する。絶対に。

「はい。俺は行きます。先生、やっぱり教師の話はなしです。この子だって十分輝いてますよ、それに俺たちを育ててくれたのは先生じゃないですか。その実績を誇ってください。それと……この子を頼みます。……イエローちゃん。俺はやるよ。だから無理せず今を楽しんでいい。君が無茶をする必要はない。みんなの未来はちゃんと守るさ」

「……………はい。お気をつけて」

そして耳元でぼそぼそと。

「後、レッドの事頑張れよ。めちやくちや応援してるぞ。いざとなったら押し倒せ。抵抗されたら引き倒せ」

「そそそ！ そんなんじゃないですよ！ そうなれたらいいですけど

「……もう！」

俺はお別れとばかりにイエローちゃんを抱きしめて頭をくしゃくしゃと乱暴に撫で、決意の元にこの学び舎を去ろうとした。

その時。

「あ、エリカさんだー！」

イエローの友達少女が声を上げた。先生が前に言っていた通りに有名な。やっぱ知名度って大事だな。

俺とイエローちゃんも抱き合ったまま少女が見ている方向に首を回す。

「……………」

確かにそこには何かを明言できないが、確かな凄みを放つエリカがいた。彼女の放つ無言のプレッシャーに耐えかねた先生がエリカに声を掛けた。

「や……やあやあエリカ君！ 今日はどうしたんだい!? ジムはいいのかい!？」

「ええ。少し近くに寄ったので。ところで……そちらの可愛らしいお嬢さんはどちら様ですか？ この前の講義では見なかった気がするのですが？」

あんだだけいた生徒の顔全部覚えたのか？できない……とは言いきれないな。

「あ、ああ！ イエロー君だね！ この子はエイジュ君が連れてきた子さー！ 中々良いセンスの持ち主だよー！」

それを聞いたエリカは表情を変えた。そして状況は悪化した。

「エイジュさんの……子供!? 貴女……母親は誰ですか？」

「ええ!? あっ！ 違います！ 私はエイジュさんとは……!？」

エリカは幽鬼のようにふらふらとイエローちゃんへと歩み寄って肩に手を置く。

（というか言っていない！ 誰も俺の子供とは言っていない！ 連れて来ただけだし!）

心の中で叫びながら俺はなんとかエリカをイエローちゃんから引き離そうとする。

「おい待て！ 何言ってるんだジムリーダー！」

「止めないでくださいまし！ 私よりもご自分の子がそんなに大事ですか！」

仮に自分の子だったらかつてのクラスメイトよりは大事だと思うけど、それはややこしくなるので言わなかった。

「俺の子供とか誰も言っていないから！ というかこの子はこう見えても10歳だぞ！ どう考えてもお前と同じ年の俺の子供なわけがないだろ！ 普通8歳じゃ父親にはなれんわ！」

この世界は一般的に大人扱いされるのが十歳。なので結婚年齢もそこそこ早い。俺やエリカの歳なら既に子持ちになっていてもおかしいことはないが十歳の子は無理。まちむり。だつて流星に一桁歳ではそもそも生理学的に不可能である。俺は特殊事例じゃないから。「でも同じ金髪じゃないですか！ それにさつき抱き合っていたのも見ていたんですからね!!」

「それだけで!? ふぎけん俺はまだ童貞だ！ あれはイツシユ流のちよつとしたお別れの挨拶だ！ とにかくちよつと離れろ！」

確かに俺は金髪だがこの世界では地毛が金髪とかその辺に普通にいる。イエローちゃんもそうだし。

エリカを俺のマッスルによつては羽交い締めにし、なんとかイエローちゃんから離れさせた。やつぱり鍛えた甲斐あるわ。

そして今度は急に機嫌良さそうに「失礼しました。後日なにかお詫びしますね。ではごきげんよう」とか言つてエリカはそのまま踵を返して去つて行った。

「え？ なんだつたのあいつ？ ……何しに来たの？ イエローちゃん大丈夫かい？」

「はい。ボクは大丈夫です。それと……あんまりあの人のこと怒つたり嫌いにならないであげてください」

「いや。そつちがなんともないなら特には……俺の方があいつのこと知ってるくらいだし。でもなんで？」

「あはは……」

イエローちゃんは俺の質問笑つて誤魔化した。そのまま改めて俺

たちはその場で別れたのだった。

少し離れたら後ろで少女たちが先生にドウテイってなあにと聞いていた。後は任せたぞ先生。俺はカッコいい別れは無理だと察したのでにげだした。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

俺は再び社長と密会をしていた。

今度はタمامシシテイにある一軒の飲食店で会っている。本当ならバーとかがかっこいいけど俺はお酒飲めないし。今のタمامシはどこも厳戒態勢なので近場では最も安全だ。無論警戒は怠っていない。

「エイジユ君。本当にやるのかね？　こう言っただけだが君がそこまでやる必要があるとは……」

社長は引き止めるが俺の心は決まっていた。引き止めてもらえないのは当然嬉しい。だが多分このタイミングがベストだ。

「いいえ。やります。正直言うんですけどこのままで乗り越えられたらいいと思っただけです。今もそうです。でもやっぱり無理なんです。それは二足のわらじで行けるほど俺は器用ではなかったというだけです」

今のままではこの苦難を越えられないかもしれない。だけどその現状さえ捨てれば、戦いの準備を整える時間もできる。勝つためならその手を選ばない選択肢はないだろう。

「俺の夢は終わってしまいましたけれど、今も夢に向かって進む子供たちが大勢います。やっぱり俺はそれを守りたいんです。例えば……好きな仕事をやめても」

俺はその次の出勤日。タمامシデパートの人事へと辞表を提出した。

人員が余っていたことや、社長がこっそりと手を回してくれたおかげであれよあれよと事が進み、わずか三日で辞意は聞き届けられた。

……俺はフレンドリイショップを退職した。